営業所新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

空 港 跡 地 遺 跡

（本村地区）

2012 年 3 月

山下　淳二

高松市教育委員会

1　SH01 全景（北東から）

2　SH01 全景（西から）

例　言

1　本書は，営業所新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書であり，空港跡地遺跡（本村地区）の報告を収録した。

2　発掘調査地ならびに調査期間は次のとおりである。
調 査 地：高松市上林町 505 番地
発掘調査：平成 23 年 2 月 19 日～同年 3 月 15 日（実働 22 日）
整理作業：平成 23 年 4 月 4 日～同年 12 月 28 日
調査面積：約 900㎡

3　発掘調査から報告書の編集まで高松市教育委員会が担当し,その費用は旧土地所有者が全額を負担した。

4　現地調査および整理作業は，高松市教育委員会教育部文化財課文化財専門員 波多野篤が担当した。

5　本書の執筆・編集は波多野が担当した。

6　発掘調査から整理作業，報告書執筆を実施するにあたって，下記の方々および関係諸機関から御教示を得た。記して厚く謝意を表する（五十音順，敬称略）。
大西　達男，香川県教育委員会，㈱エムケーインデクト，多田　哲男，筒井　久，山下　淳二

7　本調査に関連して，以下の業務を委託発注により実施した。
写真測量・図化業務　　株式会社 四航コンサルタント
遺物写真撮影　　西大寺フォト

8　標高は東京湾平均海面高度を基準とし，座標は国土座標第Ⅳ系（世界測地系）に従った。また，方位は座標北を示す。

9　本書で用いる遺構の略号は次のとおりである。
SD：溝　　SH：竪穴建物跡　　SK：土坑　　SP：柱穴　　SX：性格不明遺構

10　本書で使用している挿図の縮尺は，遺構図は 1/40，土器実測図は 1/4，石器実測図は 1/2 を原則としているが，一部を異なる縮尺としており，各図に縮尺を明示している。また，写真図版における遺物の縮尺はすべて任意である。

11　発掘調査で得られたすべての資料は高松市教育委員会で保管している。

本 文 目 次

第１章　位置と環境……1
　第１節　空港跡地遺跡の位置と地理的環境……1
　第２節　弥生時代の空港跡地遺跡の変遷……2
第２章　調査の経緯と経過……4
　第１節　発掘調査の契機……4
　第２節　発掘調査の経過（調査日誌抄）……4
　第３節　整理作業の経過……5
第３章　調査成果……6
　第１節　試掘調査の成果……6
　　⑴　試掘調査の方法……6
　　⑵　調査成果の要点……6
　第２節　本調査の成果……6
　　⑴　地形と層序……6
　　⑵　調査方法……7
　　⑶　検出遺構・出土遺物の概要……8
　　⑷　遺物包含層の調査…… 11
　　⑸　検出遺構・出土遺物…… 11
第４章　総括…… 25
　第１節　時期別の変遷…… 25
　第２節　弥生時代後期中葉の竪穴建物跡について… 26

挿 図 目 次

図１　空港跡地遺跡の位置とおもな河川　……1
図２　空港跡地遺跡周辺の地形と調査地　……3
図３　調査区配置図（1/2500）……7
図４　調査区 平面図･断面図（1/200，1/80）… 9･10
図５　遺物包含層出土遺物実測図
　（土器：1/4，石器：1/2）…… 12
図６　SH01 平面図・断面図（1/100，1/40）… 14
図７　SH01 出土遺物実測図（1/4）…… 15
図８　SP19 出土遺物実測図（土器:1/4, 石器:1/2)… 15
図９　土坑（SK01 ～ 06）平面図･断面図（1/40）… 17
図10　性格不明遺構（SX02 ～ 04）
　平面図・断面図（1/40）…… 19
図11　性格不明遺構（SX02・03）出土遺物実測図
　（土器：1/4，石器：1/2）…… 20
図12　溝断面図（1/40，1/80）…… 21
図13　SD06 内土坑 平面図・断面図（1/40）… 22
図14　SD05・06 出土遺物実測図（1/4）…… 23
図15　その他の出土遺物（1/4）…… 23

挿 表 目 次

表１　ピット一覧表 …… 28
表２　土器 観察表⑴・⑵ …… 29・30
表３　石器観察表 …… 30

本文写真目次

写真１　北側調査区作業風景（南東から）……5
写真２　南側調査区測量風景（北から）……5
写真３　バックホウによる埋め戻し作業
　（南西から）……5
写真４　試掘調査全景（南から）……6
写真５　試掘調査遺構検出状況（北東から）……6
写真６　SH01 埋土 遺物出土状況（南から）… 13
写真７　SX04 A 断面（南から）…… 19
写真８　SX04 B 断面（南から）…… 19
写真９　SD06 埋土上半 遺物出土状況
　（東から）…… 22
写真 10　SE01 断面（東から）…… 24
写真 11　南側調査区 全景（北西から）…… 27
写真 12　SH01 全景（西から）…… 31

第１章　位置と環境

第１節　空港跡地遺跡の位置と地理的環境

高松市は香川県のほぼ中央に位置する県都で(図1),平成17年9月および平成18年1月に近隣の庵治町,牟礼町，塩江町，香川町，香南町，国分寺町の6町と合併した。その結果，市域の面積も合併前の約1.9倍にあたる約375km²に拡大し，さらに人口も約42万人となり，これまで以上に四国における中核的な都市として重要な役割を担っている。

さて，現在の高松市における主要な居住区域となっているのが高松平野と呼ばれる平野部で，地形分類では讃岐山脈を源とする複数の河川によって形成された沖積地と位置づけられている。高松平野には，西から本津川，香東川，御坊川，詰田川，春日川，新川というおもに6つの河川が北流して瀬戸内海へと流れ込んでいる。これらの河川のなかでも，香東川は現在の春日川よりも西側の沖積平野を形成したと考えられており，高松平野の地形形成過程を考える場合に欠くことのできない河川のひとつと言える。

次に，調査地の周辺に目を転じると，林町や木太町周辺では，これまでの調査や研究によって埋没した旧河道が複数存在することが明らかとなっている。これらの旧河道は，移動や埋没の過程で後背湿地や自然堤防などを形成し，現在よりも起伏に富んだ地形を生み出していたと考えられている。しかし，旧地形の起伏は調査地周辺に限られたことではなく，例えば香東川扇状地上にある複数の開析谷が示すように，高松平野は微細な起伏によって形成された平野と言え，その地形を後世に平坦化し，さらに水田を造成する過程のなかで，現在の景観の源を築きあげたと考えられている。

今回調査をおこなった空港跡地遺跡（本村地区）は，高松市上林町に所在する。調査地の周囲は近年の宅地造成によって多くの建造物が新たに建築されているが，いまだ水田も多く残されており，調査地も調査をおこなう前は水稲耕作がおこなわれていた場所である。

図１　空港跡地遺跡の位置とおもな河川

第 2 節　弥生時代の空港跡地遺跡の変遷

調査地周辺では，縄文時代から近世に至るまでの多数の遺跡が確認されており，それらの発掘調査成果をとおして各時期の集落の様子が徐々に明らかになっている。本節では，今回の調査で確認した遺構の主要な時期にあたる弥生時代に注目し，調査地周辺の調査成果を整理したうえで，今回の調査地の位置づけをおこなう。なお，調査地周辺の各時期の遺跡の概要については，高松市教育委員会（編）2011『空港跡地遺跡』に詳細に整理されているのでそちらを参照願いたい[1)]。

調査地周辺で大規模に発掘調査がなされたのが香川県教育委員会による空港跡地整備事業，およびインテリジェントパーク整備事業などに伴う空港跡地遺跡の発掘調査である。空港跡地遺跡の調査によって，小規模な調査では明らかにできない遺跡全体の様相をより具体的に検討することが可能となった。今回調査した範囲は，これらの調査地に隣接した場所に位置するため，周辺の大規模調査の成果と対比させることで，空港跡地遺跡のなかでどのような位置にあるのかが検討できる。

さて，これまでに香川県教育委員会が刊行した空港跡地遺跡の各報告書で検討されている内容は，当遺跡の弥生時代の集落の動態を語るうえで欠くことができない。例えば，乗松氏による弥生時代後期中葉から古墳時代前期初頭における集落の動態についての整理は，遺跡の主要な時期の変遷を詳細に捉えることができる優れた報告である[2)]。また，蔵本氏による空港跡地遺跡の地形環境の検討は，周囲の旧地形を復元することと，それに伴った遺跡の動態を整理している点で参考となる[3)]。そこで，本節では蔵本氏の検討で示された微高地などの分類に従い，これまでに調査された空港跡地遺跡の弥生時代における微高地単位の動向を微視的に整理する。

蔵本氏は微高地を大別して A 微高地と B 微高地のふたつに分け，さらに B 微高地は B1 ～ B4 までの 4 つに細分している。A 微高地は空港跡地遺跡の西側，B 微高地はそれよりも東側に位置する（図 2）。それでは，これらの分類を念頭に，以下に時期別の変遷を概観することにしよう。

弥生時代前期

A 微高地と B 微高地の境界付近に位置する池台池周辺で，前期末から中期初頭の自然流路が 3 条検出されているほか[4)]，自然流路の西側などの微高地で，約 20 基の土坑などが確認されている[5)]。また，これらの調査地の北側にあたる宮西・一角遺跡でも前期の土坑が検出されている。一方，それよりも東に目を転ずると，B3 微高地と B4 微高地を画する低地部で南北溝が検出されているほか[6)]，B4 微高地で前期後半の遺物を含む自然流路が検出されている[7)]。

以上の状況より，空港跡地遺跡周辺は，前期段階で流路は完全に埋没しておらず，流路が複数条存在したことが分かる。また，遺跡の西側に位置する A 微高地周辺ではわずかながら人的活動の痕跡が認められ，低調ながらも土地利用がおこなわれていたことが伺える。しかしながら，空港跡地遺跡では明確な居住遺構はほとんど認められず，弥生時代前期の段階では大規模な集落の形成は果たされていないものと考えられる。

弥生時代中期

B1 微高地で中期後半の土坑が検出されているが[8)]，それ以外の場所では当該期の明確な遺構は検出されておらず，空港跡地遺跡全体で見た場合に，弥生時代中期は土地利用の低調な時期と理解することができる。

弥生時代後期

後期は当遺跡が主要な土地利用をおこなう時期にあたる。A 微高地と B1 微高地の境界付近では，後期の竪穴建物跡と溝状遺構が検出されている[9)]。それよりも東側に位置する B1 微高地では，後期中葉に帰属する方形の竪穴建物跡が 3 棟，それ以外に溝や土坑が検出されている[10)]。また，同じ調査区では後期後葉から終末にかけての方形の竪穴建物跡が 10 棟検出されており，さらにこの時期に集落の規模が拡大することが判明している。また，B2 微高地では，後期前半の竪穴建物跡が 1 棟確認されており，同一の調査区で後期後半の竪穴建物跡が 10 棟以上検出されている[11)]。このことから，B2 微高地でも後期後半に集落の規模が拡大する現象が確認できる。B3 微高地では，後期前葉の水路が 1 条検出されており，同

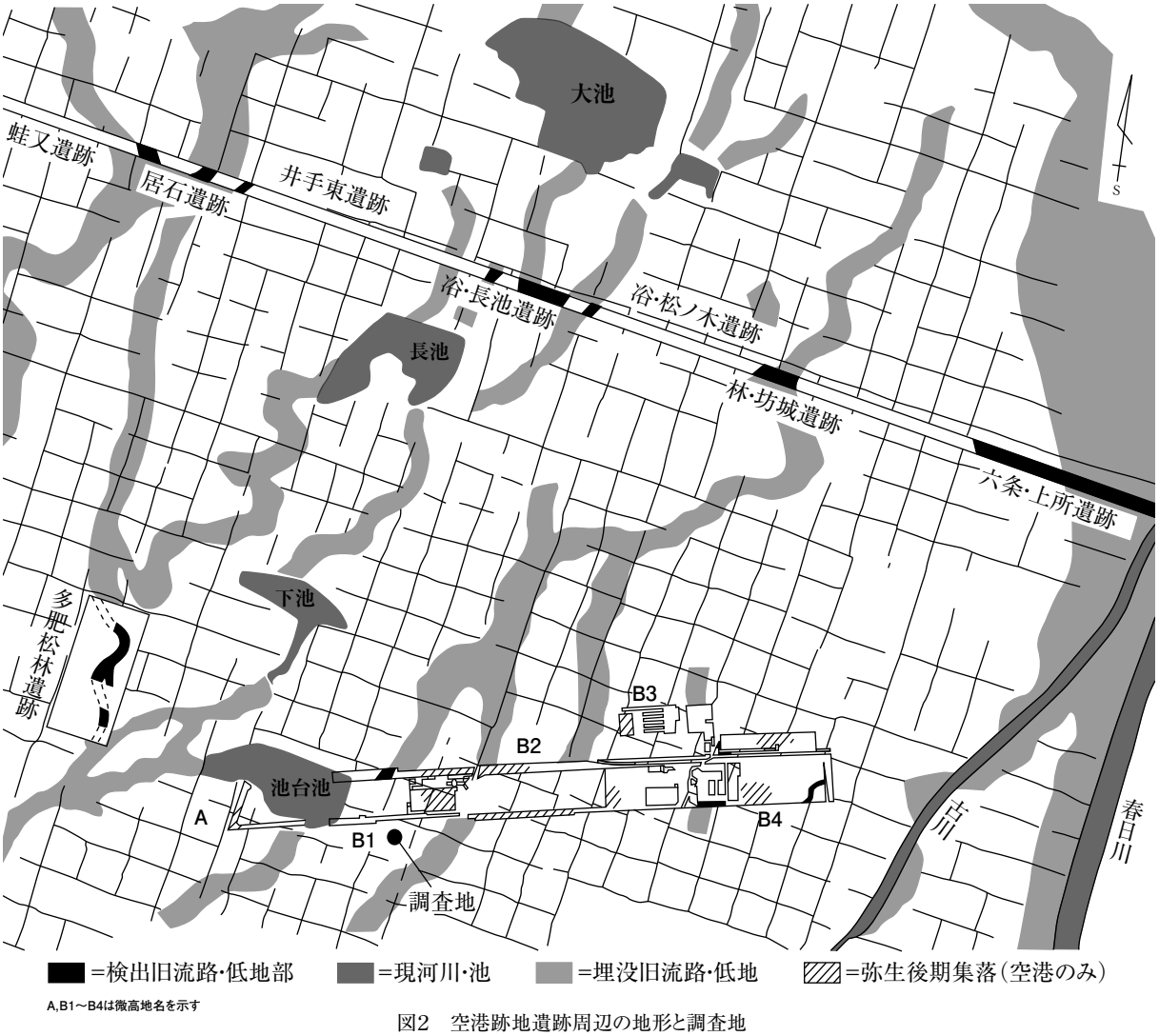


図2　空港跡地遺跡周辺の地形と調査地
（蔵本（編）1997『空港跡地遺跡Ⅱ』P169の図に加筆・修正）

一の調査区では後期後半に竪穴建物跡や掘立柱建物跡などがわずかに認められ，小規模な集落が形成されるようである[12]。B4 微高地では，後期中葉の基幹水路が検出されており，周辺に耕作域が存在する可能性が想定されている[13]。同じく B4 微高地では，後期後半に微高地縁辺に円形や方形からなる竪穴建物跡が構築され，その周囲では粘土採掘坑も確認されている[14]。

これまで見てきたように，空港跡地遺跡においては後期前葉の遺構数はそれほど多くはないが，中葉以降は遺構数も急増し，土地利用が活発化したことが推定できる。また，後期後半以降の土地利用は遺跡の各所で認められ，広範囲で土地利用が進んだ時期とも考えられる。この要因のひとつとして，流路の埋没が進み地形面が今まで以上に安定したことが考えられる。しかしそれだけでは集落の動態の要因を到底理解したとは言えず，これまでに指摘されているように，周辺の弥生時代の集落と同様に自然環境のほかに社会環境の変化も要因のひとつと捉えて理解すべき事象と考えられる[15]。

さて，今回の調査地については，蔵本氏の微高地の分類では B1 微高地上に位置する。同一の微高地の北側では後期中葉以降に竪穴建物跡などからなる集落が営まれるが，これらの地点よりもさらに標高の高い当調査区でも後期中葉の竪穴建物跡が検出されており，集落域は南側にも展開していたことが明らかとなった。このことから，今回の調査によって，現在の空港跡地遺跡の範囲のさらに南側も，後期段階には居住域の一角として土地利用があったことが確認できたことになる。

註・引用文献

1）渡邊　　誠（編）2011『住宅型有料老人ホームリトモ高松新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 空港跡地遺跡』高松市教育委員会
2）乗松　真也（編）2004『空港跡地遺跡Ⅷ 空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第 8 冊』香川県教育委員会・香川県土地開発公社

3）蔵本　晋司（編）1997『空港跡地遺跡Ⅱ 空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第2冊』香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・香川県土地開発公社
4）山元　素子（編）2003『空港跡地遺跡（K地区）インテリジェントパーク整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・香川県土地開発公社
5）木下　晴一（編）2002『空港跡地遺跡Ⅴ 空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第5冊』香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・香川県土地開発公社
6）註3）前掲
7）森下　友子（編）1998『空港跡地遺跡Ⅲ 空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第3冊』香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・香川県土地開発公社
8）註4）前掲
9）註5）前掲
10）森　格也（編）2007『空港跡地遺跡Ⅸ 空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第9冊』香川県教育委員会
11）西岡　達哉（編）1996『空港跡地遺跡Ⅰ 空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第1冊』香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・香川県土地開発公社
12）註3）前掲
13）註2）前掲
14）蔵本晋司（編）2003『空港跡地遺跡Ⅵ（G地区）空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第6冊』香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・香川県土地開発公社
15）大久保　徹也（編）1995『上天神遺跡』香川県教育委員会

第2章　調査の経緯と経過

第1節　発掘調査の契機

平成22年10月に土地所有者から高松市教育委員会に上林町505番地の包蔵地照会があった。双方は，当該地が周知の埋蔵文化財包蔵地の空港跡地遺跡に隣接することから，任意の協力による試掘調査の実施等を協議し，同月18日付けで土地所有者より試掘調査の依頼が高松市教育委員会に提出され，任意協力による試掘調査を同月28日に実施することとなった。

試掘調査では，事業予定地に溝やピットなどの遺構が認められ，さらに弥生時代を中心とする遺物が出土した。特に，溝などの遺構は事業予定地全域に掘削されていることが推定された。この結果を香川県教育委員会に報告したところ，遺構･遺物が分布する事業予定地全域が周知の埋蔵文化財包蔵地に認定された。

これらの状況を受けて，事業者等と高松市教育委員会では複数回の協議を重ねたが，建設予定の建物が現時点での計画から近い将来に増築される可能性があったため，事業予定地全域を対象とした埋蔵文化財の保護措置が必要となった。これらの経緯から，同年12月27日付けで土地所有者より埋蔵文化財発掘の届出が提出され，平成23年1月28日付けで香川県教育委員会より工事着工前に発掘調査を実施する旨の指導があった。

その後，発掘調査の実施に向けて事業者等と高松市教育委員会は協議を重ね，費用面などの合意が形成されたため，同年2月15日付けで事業を計画するダイコー通産株式会社と土地所有者双方の代理人と協定書を締結し，「ダイコー通産株式会社高松営業所新築工事に伴う埋蔵文化財調査管理業務」として，埋蔵文化財の調査を開始することとなった。

発掘調査の対象となったのは事業予定地全域で，調査面積は約900㎡，調査期間は平成23年2月19日～同年3月15日までの実働22日である。発掘調査によって，弥生時代後期を中心とする竪穴建物跡や溝などを検出した。

第2節　発掘調査の経過（調査日誌抄）

埋蔵文化財の発掘調査については，場内に排土置き場を確保するため，対象地の北側と南側で2回に分けて実施した。調査は，重機等の搬出経路を確保するため対象地の南側から着手した。南側の調査区の調査開始日は平成23年2月19日で，3月3日に委託による測量・図化業務を実施し，3月4日に南側調査区の埋め戻しを完了した。3月5日からは，北側の調査区の調査に移行し，3月15日に調査区の埋め戻しと調査機材の撤収がすべて完了した。

調査の経過については，下記の調査日誌抄を参照願いたい。

調査日誌抄（平成23年2月19日～同年3月15日）

2月19日（土）　調査道具の搬入。調査区を設定し重機掘削を開始する。

2月21日（月）　作業員による掘削作業を開始する。重機掘削を継続し，並行して遺構検出作業をおこなう。

2月22日（火）　重機掘削が完了する。バックホウにて排土整理をおこなう。遺構検出作業を継続し，一部の遺構の掘削を始める。

2月23日（水）　SH01 やその他の遺構の掘削を始める。SH01 については，掘り形が円形であることやその規模から，竪穴建物跡の可能性が考えられた。

2月25日（金）　調査区の北側で検出した溝の掘削を開始する。

3月1日（火）　SH01 の床面の遺構検出をおこなう。遺構の中央付近に土坑，また壁面に沿うように複数のピットを検出した。

3月2日（水）　SH01 の床面の遺構を調査し，完掘作業をおこなう。並行して調査区の掃除をおこない，全景写真を撮影した。

3月3日（木）　株式会社四航コンサルタントに委託した写真測量・図化業務を実施する。

3月4日（金）　南側の調査区を埋め戻す。埋め戻しは本日で完了。

3月5日（土）　北側の調査区の重機掘削を開始する。調査区北側にある撹乱（粘土採掘坑？）の掘削を人力でおこなう。

3月7日（月）　遺構面までの重機掘削を継続する。調査区中央付近で遺物包含層より多量の遺物が出土したため，その部分は人力で掘削し遺物を取り上げた。

3月8日（火）　重機掘削と遺構検出作業が完了する。一部の遺構の掘削に着手する。

3月10日（木）　遺構の調査が完了する。平面を掃除し，全景写真の撮影をおこなう。

3月11日（金）　平面図・断面図を作成する（12 日もおこない，記録作成を完了する）。

3月14日（月）　Ⅲ層の断ち割り調査を実施し，堆積状況を確認する。補足調査ののち，重機による埋め戻し作業を開始する。

3月15日（火）　埋め戻しおよび調査道具の撤収が完了する。本日で現地作業がすべて終了する。

写真１　北側調査区作業風景（南東から）

写真２　南側調査区測量風景（北から）

写真３　バックホウによる埋め戻し作業（南西から）

第３節　整理作業の経過

調査終了後，平成 23 年 4 月 4 日から本格的な整理作業を開始した。作業のおもな内容は，現場で作成した図面・写真の基礎整理，出土遺物の洗浄・接合・実測作業，そして遺構図・遺物実測図のトレースや挿図の作成などである。おおむね同年 5 月下旬にこれらの作業が完了し，それ以降は原稿の執筆や編集作業を中心に進めた。

なお，整理期間中に出土遺物の写真撮影を西大寺フォトに委託して実施した。

第３章　調査成果

第１節　試掘調査の成果

⑴　試掘調査の方法

試掘調査は，遺構･遺物の有無を確認することと，遺構が認められた場合にどのように分布するのかを把握することをおもな目的として実施した。試掘調査は，対象地のほぼ中央に南北方向の試掘トレンチを１本設定して調査した（図 3)。試掘調査面積は約 43㎡である。調査は，バックホウを用いて遺構面までの掘削をおこない，人力で遺構面の精査と遺構検出作業を実施した。なお，試掘調査は平成 22 年 10 月 28 日に実働１日で実施した。

写真４　試掘調査 全景（南から）

写真５　試掘調査 遺構検出状況（北東から）

⑵　調査成果の要点

試掘調査の詳細については，平成 22 年度に刊行した高松市教育委員会（編）『高松市内遺跡発掘調査概報―平成 22 年度国庫補助事業―』に掲載しており，そちらを参照願いたい。試掘調査における要点は以下の４点である。

①現状地盤から遺構面までの深さは，浅い箇所で約 50cm，深い箇所で約 75cm である。

②試掘調査区の中央付近が浅い谷状の地形で，その低地部のみに弥生時代の遺物を含む黒色粘質土（遺物包含層）が堆積する。

③溝３条，ピット１基，性格不明の落ち込みを１基検出し，遺物包含層出土遺物などから，遺構の帰属時期は弥生時代の可能性が考えられる。

④溝を検出したことから，遺構の分布範囲は事業予定地全域におよぶことが推定できる。

以上の成果を受けて，当地は新規の埋蔵文化財包蔵地となり，当該地で工事をおこなう場合は埋蔵文化財に対する保護措置が必要という指導が香川県教育委員会よりなされた。

なお，試掘調査ではビニール袋４袋分の遺物が出土したが，そのうち図化できたのは，遺物包含層から出土した２点の土器である（図５－1･2)。この２点は，弥生時代中期から後期に帰属する遺物と考えられ，本調査で同一層から出土した遺物と同じ年代幅のなかに収まる遺物である。

第２節　本調査の成果

⑴　地形と層序

a. 調査区周辺と調査区内の地形

調査をおこなった地点の周辺は，緩やかに北に下る地形面で，周辺の地割りとは大きく異なる点が特徴である。これは，昭和 19 年の旧陸軍飛行場建設に伴う大規模な整地が要因で，そのため現在の地形から旧地形を想起することは難しい。なお，調査区の現状地盤の標高はおよそ 19.9 ～ 20.0m である（図 3)。

次に調査区内の地形を見ると，試掘調査でも明らかだったように，調査区の中央付近は浅い谷状を呈する地形面（以下，谷状地形とする）で，その北側と南側では高低差の少ない平坦面が広がる。南側の平坦面の標高は 19.3 ～ 19.45m，北側の平坦面は 19.2 ～ 19.4m であり，谷状地形の最も低い部分の標高は 18.9m であるから，調査区内における地形面の高低差はおよそ 0.5m ということになる。

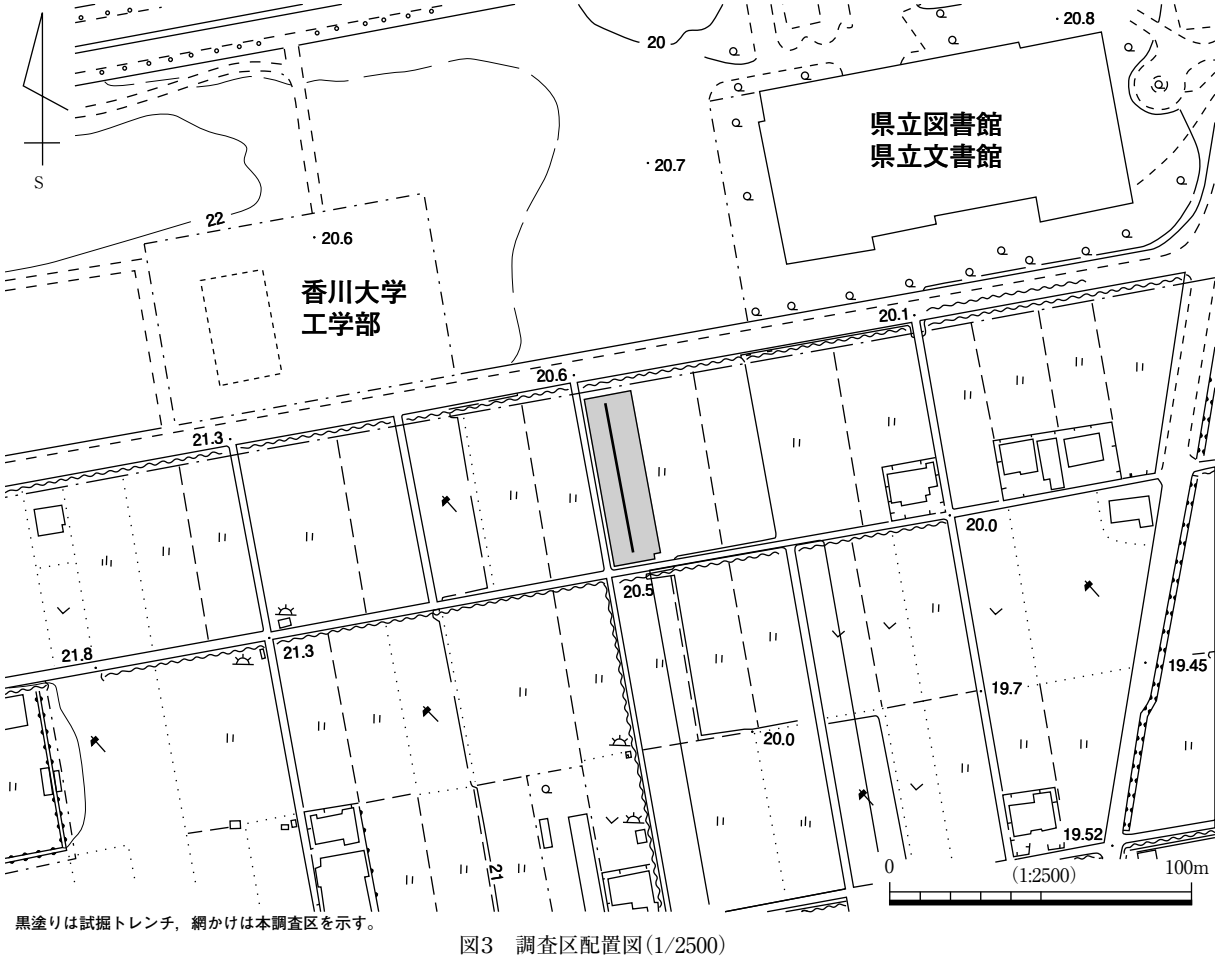


図3　調査区配置図(1/2500)

b. 層序（図版１－１・2）

調査地点の層序は試掘調査で確認した層序と変更はなく，大別して３層にまとめることができる（上位の堆積から順にⅠ～Ⅲ層とする）。Ⅰ層は現代耕作土・床土，Ⅱ層は中世～近世にかけての耕作関連の土層と考えられる。Ⅲ層は河川堆積を起源とする自然堆積層で，調査区南端から約 11m 北側の地点までは粒径の大きい自然礫を多量に含み，それよりも北側の地点では粒径が小さい堆積物で構成される傾向が観察できた（図 4)。なお，調査中の所見として，調査区北端はⅢ層上面での遺構検出時から湧水が多く認められた。

これらの堆積層以外に，調査区中央付近の谷状地形の内部のみに黒褐色～灰黄褐色シルト質極細砂が 10 ～ 45㎝の厚さで堆積していた。黒褐色～灰黄褐色シルト質極細砂は谷状地形以外の場所では認められないことから，調査区内の低地部を被覆する局所的な堆積と言える。なお，黒褐色～灰黄褐色シルト質極細砂は，明確なものとして弥生時代中期～後期にかけての遺物を含んでおり，最も新しい遺物の年代観より弥生時代後期以降に堆積したことが分かる（以下，遺物包含層と呼称する)。

なお，遺構の調査を終えたのちにⅢ層の堆積状況を観察することと，さらに下層で遺構・遺物が存在しないかを確認するために，後述する SD06 のすぐ北側で遺構面から約 1.6m 下まで断ち割り調査を実施した（図版１－２)。その結果，遺構面から約 75cm 下まではシルト質粘土を基調とする堆積層，それより下位には堆積物の粒径がやや大きいシルト～細砂を主体とする堆積層が認められた。限られた範囲しか調査していないが，断ち割り調査でⅢ層以下に遺構・遺物は認められなかった。なお，今回の調査で遺構を検出した地形面はⅢ層上面である。

⑵　調査方法

a. 調査区の設定・掘削

事前の協議等で示された事業計画から，対象地全域を本調査せざるを得ない状況であったため，安全面を配慮して掘削できる限界まで調査区の範囲を広げて調査した。ただし，調査区南東側には農業用の井戸

が掘削されていたが，井戸の掘削によって遺構は遺存していないと判断できたことと，井戸を保全するために，井戸から十分な距離をおいて調査区を設定した。また，調査区北端も，既設の水路や道路と隣接していることから，安全面を配慮して調査区を設定した。以上のとおり設定した本調査区の面積は，約 900 ㎡である。

当地は近年まで水田耕作がおこなわれており，土地所有者の意向により，調査着手前にⅠ層（現代耕作土）の掘削と場外搬出を調査担当者の立会いのもとに実施した。よって，本調査の壁面で観察できるのはⅡ層以下の堆積である。

Ⅰ層の搬出後に埋蔵文化財の掘削に移行したが，排土置き場を場内に確保するため，南と北で 2 回に分けて調査した。調査は，重機の搬出等の関係から南側からおこなった。遺構検出は，Ⅱ層を重機で掘削し，Ⅲ層上面を人力により精査しておこなった。なお，遺物包含層の掘削は，遺物の多寡を慎重に観察しながら，遺物量の多い SD06 の直上付近を人力で掘削し，遺物がほとんど出土しない他の地点を重機で数回に分けて掘削した。

b. 遺構番号・遺物の取り上げ

調査で検出した遺構には，遺構の性格を判断しながら遺構番号を与えた。基本的には遺構の種類ごとに遺構の略号を冠し，その下位に 01 から番号を付している。ただし，調査中および調査後の整理によって遺構の解釈に変更が生じた場合には，遺構番号に修正を加えた。よって，遺構番号に欠番が存在するものもある。なお，試掘調査においても検出遺構に遺構番号を与えているが，本調査では遺構番号を新たに付しているため，双方の遺構番号は対応しない点も予め記しておく。

遺物の取り上げについては，各遺構から出土した遺物は遺構単位で取り上げ，層位が判明している遺物は出土層位まで記載した。遺物包含層出土の遺物は，出土層位のみ記載し一括して取り上げた。

c. 測量・図化

全体の平面図については，時間的な制約などを考慮して，南側の調査区をポールによる写真撮影および測量を委託で実施し，北側の調査区を手書きにより図化した。双方の測量が終了したのちに，北側の調査区の手書き図面を南側の測量データと合成し，調査区全体の平面図を完成させた。なお，調査区壁面の断面図や遺構の断面図などは，手書きにより作成した。

⑶　検出遺構・出土遺物の概要（図 4，図版 1 － 3 ～ 8，10）

検出した遺構は，竪穴建物跡が 1 棟，土坑・性格不明の掘り込みが約 10 基，溝が約 10 条，ピットが約 20 基である。これらの遺構はそれほど高い密度ではないが，調査区全域に分布する傾向が認められた。遺構から出土した遺物や土層の層位的な関係から，当地区の遺構はおもに弥生時代後期中葉に形成されたものと考えられる。

次に検出した遺構の概要を述べると，ほぼ平坦な地形面である調査区南側で，掘り形が円形の竪穴建物跡（SH01）を 1 棟検出した。SH01 の直径は約 10.5m，床面積は約 85㎡であり，この点から規模の大きい竪穴建物跡と言える。また，建物床面までの深さは 20 ～ 40㎝であり，床面でもピットなどが撹乱を受けることなく遺存していた。SH01 の南東側には土器棺墓の可能性が高い遺構（SX02）を 1 基検出しているほか，土坑やピットなどが認められた。

竪穴建物跡の北側は浅い谷状地形で，その低地部は遺物包含層で被覆されていた。局所的に堆積する遺物包含層を取り除くと，谷状地形の傾斜面や底部で南東～北西方向などに掘削された溝が認められた。これらの溝は幅が狭く浅いものが大半を占める。

谷状地形の北側は比較的平坦な地形面で，そこには土坑などが掘削されていた。これらの遺構から遺物は出土していないが，遺構の埋土が他の弥生時代の遺構の埋土に類似することから，同時期に掘削された遺構の可能性が高い。

以上の状況から，ほぼ平坦面でなおかつ標高のやや高い調査区の南側が，調査区のなかではより居住に適した場所と推定できる。なお，重機掘削の最中にいくつかの遺物が出土したが，出土層位が明瞭ではなかったため，層位不明遺物として弥生土器の蓋と広口壺の口縁部片 2 点を図化し掲載した（図 15 － 62・63）。

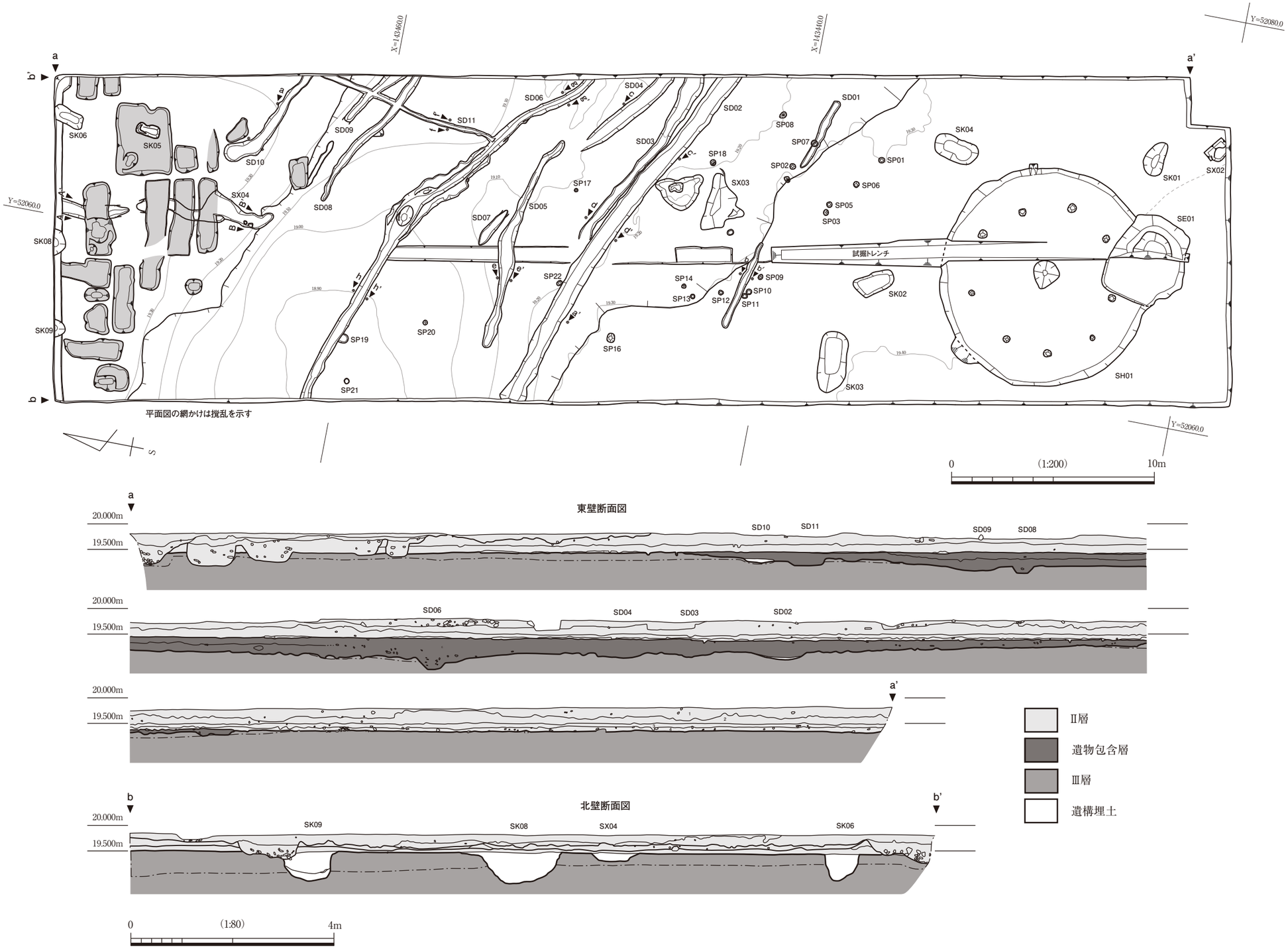


図4　調査区平面図･断面図(1/200, 1/80)

⑷　遺物包含層の調査（図 5，図版 7，8）

a. 遺物包含層の状況

遺物包含層は，調査区中央付近にある谷状地形を被覆する堆積だが，当地の基盤をなすⅢ層と質・色調ともに明瞭に異なるため，平面的にもその広がりを検出することは容易であった。遺物包含層の平面分布は，谷状地形の平面形と対応しており，この点からも調査区全域に分布しない局所的な堆積であることが再確認できる。

遺物包含層が最も厚く堆積するのは谷状地形の中央付近で，その厚さは約 45cm であった。遺物包含層は少なくとも 2 層に細分することができるが，壁面の状態によってはその細分が困難な地点があり，その場合は土層を細分していない。また，調査区西側の壁面を観察すると，土層中に砂が帯状に認められたことから，一度に堆積したわけではなく，一定の時間幅の中で堆積が進行したことが予想される。なお，後述する SD06 などいくつかの溝は，この遺物包含層によって埋没していることから，これらの溝の廃絶と遺物包含層の下部の堆積は同時になされたことが分かる。

b. 遺物の出土状況

遺物が最も多く出土したのが，調査区中央付近にある SD06 の周辺で，土器のほかに人頭大ほどの自然礫も多数認められた。これ以外の地点の遺物は極端に密集して出土するという傾向は認められなかった。

遺物の出土レベルについては遺物包含層の細分層に対応して取り上げていないが，おおむね遺物包含層の下半から出土する場合が多く認められた。

出土した遺物は弥生時代後期までの甕・壺・鉢・高杯や石器である（図 5 － 3 ～ 25）。なお，遺物包含層の下位からも弥生時代後期の遺物が出土していることから，明確に確認できる弥生時代中期の遺物は遺物包含層の形成年代を推定する遺物というよりも，周辺地における当該期の人的活動を推定させる遺物と解釈すべきだろう。なお，遺物包含層の後期の土器を細かく見ると，弥生時代後期のなかでも中葉の遺物が主体を占めるものと考えられる。以上のことから，遺物包含層の形成年代は弥生時代後期中葉以降と考えられる。

⑸　検出遺構・出土遺物

本調査で検出した遺構については，遺物が出土していない遺構も多数存在したため，すべての遺構の帰属時期を明確にすることはできなかった。さらに，検出した遺構の数もそれほど多くないため，本項では遺構の種類別に詳細を述べ，第 4 章において時期別の検出遺構の傾向を整理する。

なお，調査区北側の一部で，Ⅱ層中から掘削された長方形の掘り込みを複数検出した。この掘り込みの内部には，多数の自然礫が含まれていた。掘り込みは一定程度の間隔を空けて掘削されており，規則的に掘削された掘り込みとみることができる。掘り込みの性格は断定できないが，可能性のひとつとして粘土採掘坑などが考えられる。なお，掘り込みの底部はⅢ層に到達しているが，この地点のⅢ層は砂質系の堆積であり良好な粘土層ではないため，仮にこの掘り込みが粘土採掘坑であった場合は，混和材として使用する土を採取した可能性が考えられる。

a. 竪穴建物跡

SH01（図 6・7，図版 2，3，8）

調査区南側で検出した竪穴建物跡である。SH01 の周囲には，SK01 ～ 04 など他の遺構が重複関係を持たずに位置する。SH01 の基盤となる当地点のⅢ層は，直径の大きい自然礫を多数含んでおり，一見すると住居の構築には向かない基盤とも考えられる。それにも関わらず，SH01 が造られる点は特筆すべきだろう。なお，試掘調査では，SH01 はトレンチ南端で性格不明の掘り込みとして検出していたが，その際の観察所見として，埋土上層に多くの自然礫を含むことを確認していた。本調査によって，SH01 の平面形をすべて検出し，掘り形が円形で一定の規模を有し，なおかつ遺構の床面にピットや土坑が認められたことなどから竪穴建物跡と判断するに至った。

SH01 の南端は後世に掘削された SE01 によって破壊されるが，掘り形の形状は正円に近い円形と考えられる。SH01 の直径は約 10.5m，床面までの深さは 0.2 ～ 0.4m，住居の床面積は一部を破壊されるため推定値となるが約 85㎡である。SH01 の壁面の傾斜角度は，計測箇所により若干の違いはあるが，おおむ

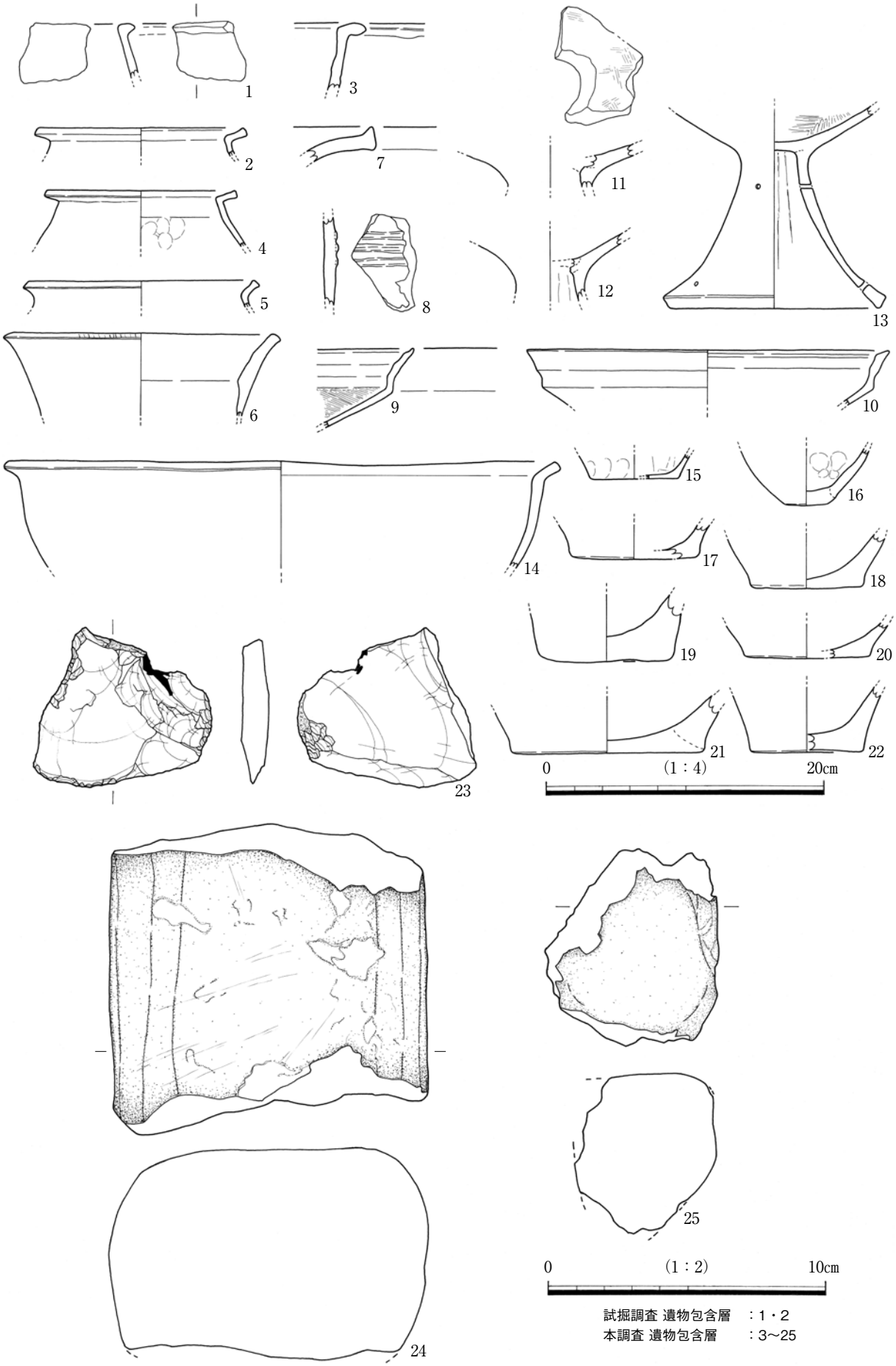


図５　遺物包含層出土遺物実測図（土器：1/4，石器：1/2）

ね 10 ～ 30° の範囲であった。

SH01 の埋土は 3 層に細分できるが，いずれも住居の機能が停止したのちに堆積したもので，貼り床などの痕跡は認められなかった。なお，埋土の最上層（図 6 の断面図 1 層）には多数の拳大の自然礫が含まれており，構成物が明瞭に下位の堆積層とは異なる状況を確認できた。1 層については，平面的な記録を作成していないが，SH01 の掘り形と同様にほぼ円形の平面分布であることを確認した。さらに，1 層の立ち上がりは比較的緩やかであるため，SH01 と重複関係を持つ異なる遺構とは判断できなかった。なお，1・2 層を中心に須恵器杯蓋片（図 7 － 37・39）が出土していることから，住居の機能が停止したのちに大半は埋まるものの浅い窪みとしては残り，一定の期間が経過した古墳時代に最終的な住居の埋没が果たされたと推定できる。また，住居のほぼ中央に設けた十字の土層観察用畦の掘削中，住居北端から 2.5m 程度南側の埋土上半で炭化物がわずかに認められた。このため，周囲も慎重に確認したが，炭化物が周囲に分布する状況は認められず，なおかつ被熱した痕跡も確認できなかったことから，局所的な炭化物の分布と判断した。

写真 6　SH01 埋土 遺物出土状況（南から）

住居床面は，若干の凹凸が認められるものの大きな高低差はなくほぼ平坦で，標高はおおむね 19m 前後であった。住居床面での遺構検出には苦慮したが，数㎝ほど床面を下げて遺構を確認した結果，住居の中央で土坑を 1 基，その周囲でピットを 9 基検出した。なお，壁溝については平面と断面で慎重に確認したが，いずれにおいても認められなかった。土坑は円形の住居のほぼ中央に位置し，平面形は西・南側がやや突出するもののおおむね円形を呈する。土坑の長軸は約 1.3m，短軸は約 1.24m，床面からの深さは約 0.3m で，埋土は 2 層に細分できる。埋土の上層は直径 1 ～ 5cm の自然礫を含む黒色砂質粘土，下層はオリーブ黒色砂質粘土である。中央土坑からは弥生時代後期の甕や高杯が出土した（図 7 － 41・42）。

住居の床面ではピットを 9 基検出したが，ピットの平均的な間隔を考慮すると，後世に掘削された SE01 の部分にはもともとピットは存在しなかった可能性が高い。よって，SH01 は 9 基のピットで上屋を支持していたものと考えられる。これらのピットは，住居の壁面から 0.9 ～ 1.5m 内側に位置し，その配置は住居の掘り形に対して同心円状となる。ピットの深さは検出面から 20㎝までであり，やや検出面を下げて検出したとは言え，十分な深さかどうかは疑問が残る。ピットの心々間の長さにはややばらつきがあり，SP01 と SP02 間が 2.1m，SP02 と SP03 間が 2.3m，SP03 と SP04 間で 2.1m，SP04 と SP05 間が 2.8m，SP05 と SP06 間が 2.9m，SP06 と SP07 間が 2.2m，SP07 と SP08 間が 2.4m，SP08 と SP09 間が 2.2m で，平均値は約 2.4m である。ピットの配置から考えられるのは，各ピットの内側の直径約 6m の範囲が，当住居の主要な生活空間として用いられたという点である。なお，これらすべてのピットで，柱痕は認められなかった。

SH01 の出土遺物の傾向として，まず住居全体から出土した遺物がコンテナ整理箱 1 箱分と少量であった点が挙げられる。これらの遺物は破片資料が多く，ほぼ完全な形で出土したのは弥生土器の鉢が 2 個体程度であった（図 7 － 33・38）。遺物は，大半が住居の埋土から出土しており，ほぼ完形の 33・38 については，この土層から出土した。一方，住居床面直上から出土する遺物はほとんどなく，原位置をとどめるものは認められなかった。出土遺物の組成は，甕・壺・鉢・高杯であり（図 7 － 26 ～ 42），石器は出土しなかった。なお，埋土の 1・2 層から出土した須恵器杯蓋（図 7 － 37・39）については，前述したとおり最終的な埋没時期を示す資料と推定でき，住居が機能した時期を示す遺物とは区別して考えるべきだろう。SH01 から出土した遺物を相対的に判断して，弥生時代後期中葉に帰属する住居と考えられる。

b. ピット（図 8，表 1，図版 9）

調査区内で合計 22 基のピットを検出した。これらのピットは調査区中央付近から南側にかけて分布し，谷状地形よりも北側には分布しない。検出したピットは，建物などに復元できる配置ではなく，このこと

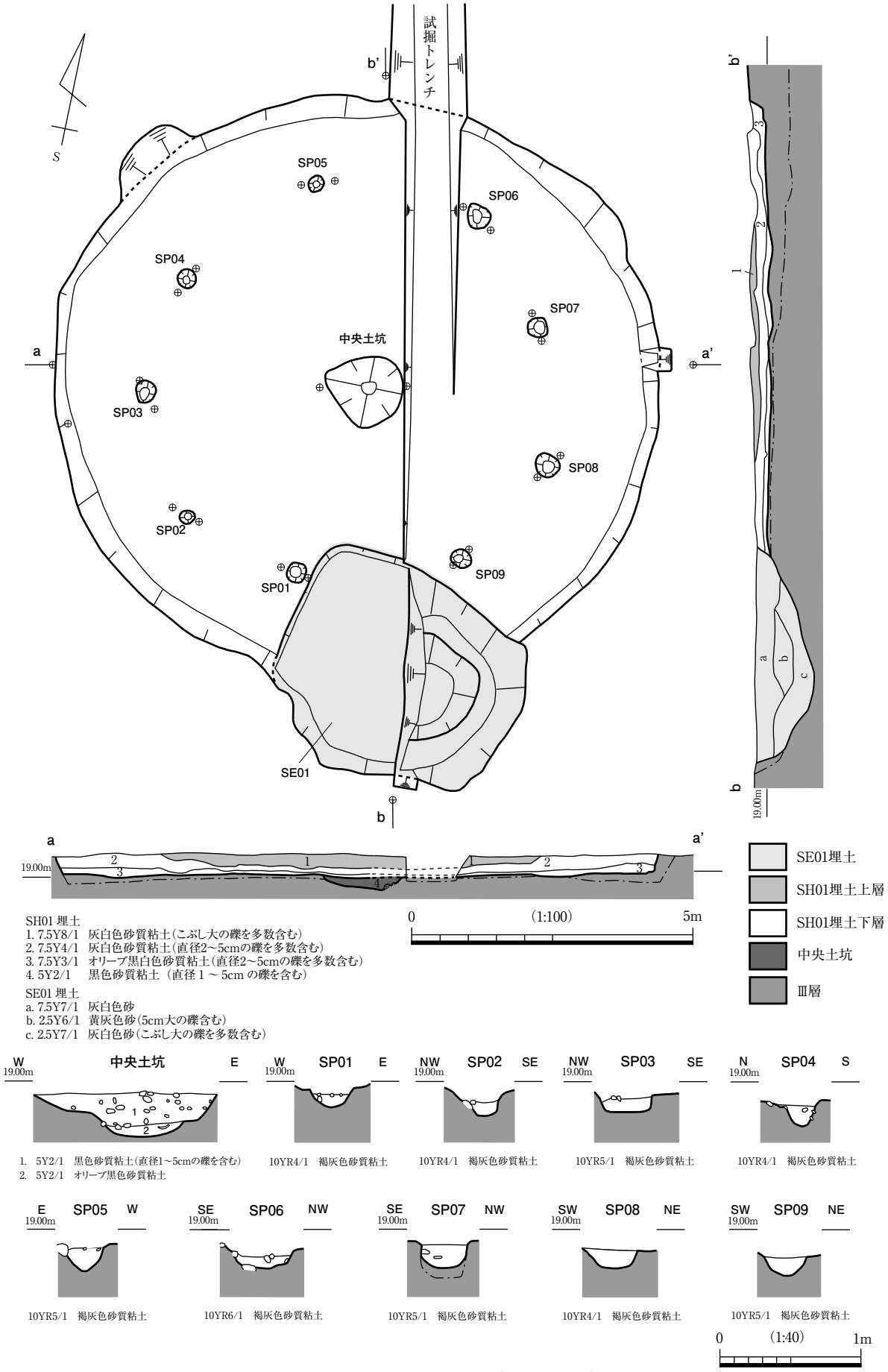


図 6　SH01 平面図・断面図（1/100，1/40）

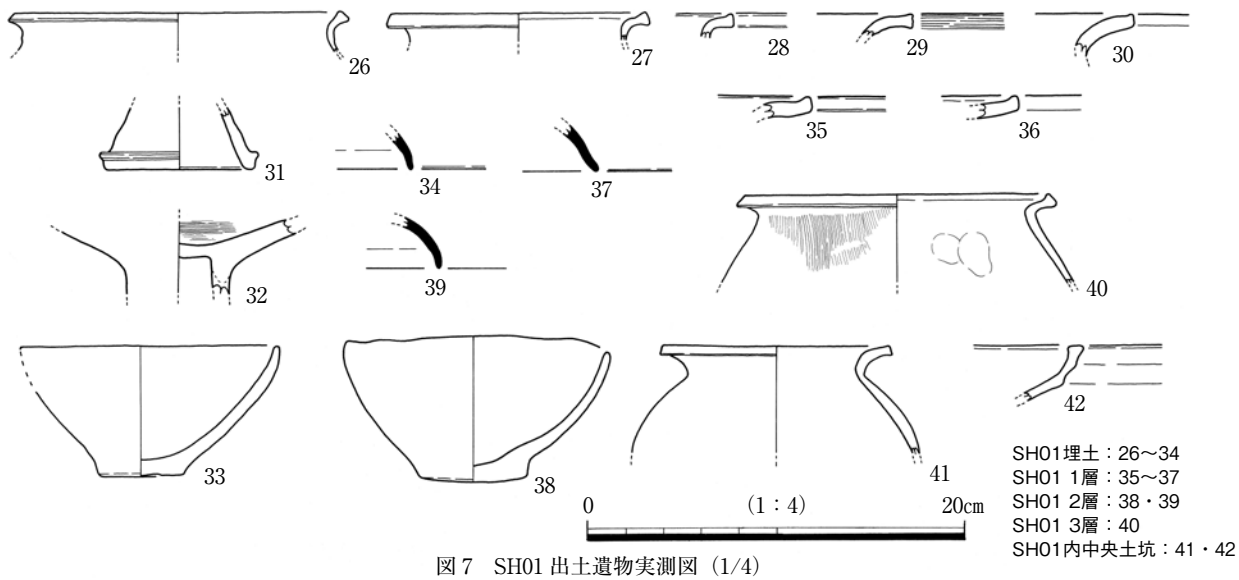


図７　SH01 出土遺物実測図（1/4）

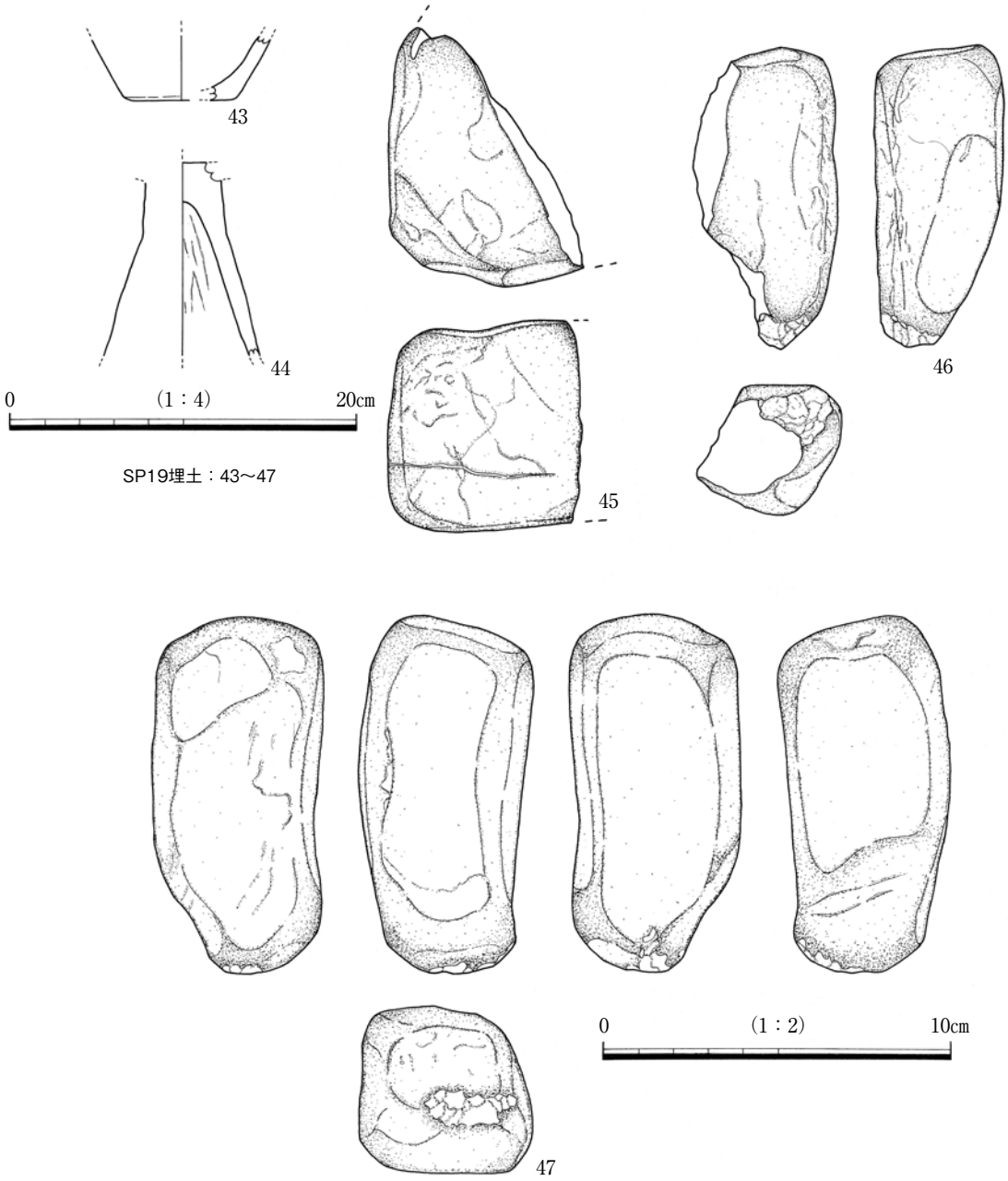


図８　SP19 出土遺物実測図（土器：1/4，石器：1/2）

から規則性のある分布とは言えない。なお，谷状地形の内部に位置するピットについては，いずれも遺物包含層を除去した後に検出したことから，この部分で検出したピットは層位的に遺物包含層が堆積する前に掘削された遺構と判断できる。

ピットの規模については表1に示したが，一部のピットを除いて大半のピットが直径30cm以内，深さが25cm以内であった。また，大半のピットが単一の土で充填されており，柱痕を確認できるピットは存在しなかった。

これらのピットのうち，遺物が出土したのはSP19のみで，SP19からは弥生時代の土器底部片や高杯脚部片，敲石などが出土した（図8－43～47）。他のピットから遺物は出土していないが，大きさや埋土が類似することから，弥生時代後期に掘削された可能性が高いと考えられる。

c. 土坑

調査区内で合計8基の土坑を検出した（SD06内で検出した土坑は除く）。これらの土坑のいずれからも遺物は出土しておらず，帰属時期を特定することはできなかった。土坑は，谷状地形の内部には掘削されておらず，それ以外の南側と北側の平坦面上に分布する傾向が認められた。

SK01（図9） 調査区の南東側に位置し，SX02の北側約2mの地点に掘削された土坑である。SK01の掘り形は東西方向に長い楕円形で，長軸約1.7m，短軸約0.94m，検出面からの深さは約0.24mである。埋土は灰褐色砂質粘土の単層だが，SK01の基盤となるⅢ層と埋土との境界は不明瞭であった。SK01から遺物は出土していない。

SK02（図9，図版4－1） 調査区中央やや南側に位置し，SH01の北側約2mの地点に掘削された土坑である。SK02の掘り形は，北東と北西の隅が方形気味ではあるが，おおむね楕円形を呈する形状である。SK02の長軸は約1.9m，短軸は0.98m，検出面からの深さは約0.46mである。SK02の底部は，遺構の基盤となるⅢ層に含まれる自然礫が露出した状態であった。このことから，Ⅲ層が多量に自然礫を含む深さで土坑の掘削を意図的に終了した可能性も考えられる。埋土は5層に細分できるが，いずれも層相は類似する。SK02からも遺物は出土していない。

SK03（図9，図版4－2） 調査区中央やや南西側に位置し，SK02の北西側約2mの地点に掘削された土坑である。SK03の掘り形はおおむね東西方向に長い楕円形で，長軸約2.9m，短軸約1.3m，検出面からの深さは約0.48mである。埋土は5層に細分でき，最下層（図9の断面図5層）は砂を主体とする堆積であるため，上位の土層とは明瞭に異なる。なお，最上層（図9の断面図1層）は下位の土層を切り込むことから，SK03の西半を掘削する際は最上層の平面形を検出したうえで掘削したが，それに伴って遺物などは出土しておらず，最上層の性格までは明らかにできなかった。SK03からも遺物は出土していない。

SK04（図9，図版4－3） 調査区中央やや南東側に位置し，SH01の北東側約1mの地点に掘削された土坑である。SK04の掘り形は南北方向が長い楕円形で，長軸約2.18m，短軸約1.08m，検出面からの深さは約0.3mである。埋土は2層に細分できるが，遺構の大半が暗灰黄色砂質粘土で埋没する。SK04から遺物は出土していない。

SK05（図9，図版4－4） 調査区北東側に位置し，SK06の南側約2.5mの地点に掘削された土坑である。SK05は，後世の撹乱によって一部を破壊されるが，掘り形は南北方向に長い隅丸長方形で，遺構の北側は二段落ちの形状を呈する。また，東側の壁面は直立気味に立ち上がる点が特徴である。SK05の長軸は約1.12m，短軸は約0.5m，検出面からの深さは約0.44mである。SK05の埋土は2層に細分できるが，いずれも粒径の小さい堆積物で構成される。SK05から遺物は出土していない。

SK06（図9，図版4－5） 調査区北東隅で検出した南北方向に長い土坑で，SK06の北西隅は調査区の外側へと続く。SK06の掘り形は隅丸長方形で，長軸約1.5m以上，短軸約0.68m，検出面からの深さは約0.66mである。埋土は3層に細分できるが，いずれも粒径の小さい堆積物で構成される。なお，SK06は，近隣に位置するSK05と埋土が類似する点が観察できた。SK06から遺物は出土していない。

SK08（図4） 調査区北端中央で検出した遺構で，遺構の北半は調査区の外側へと続くため遺構の全容は不明である。SK08の東西長は約1.28m，南北長は0.56m以上，深さは約0.6mである。埋土は単層で，灰色砂質粘土で埋没する。SK08から遺物は出土していない。

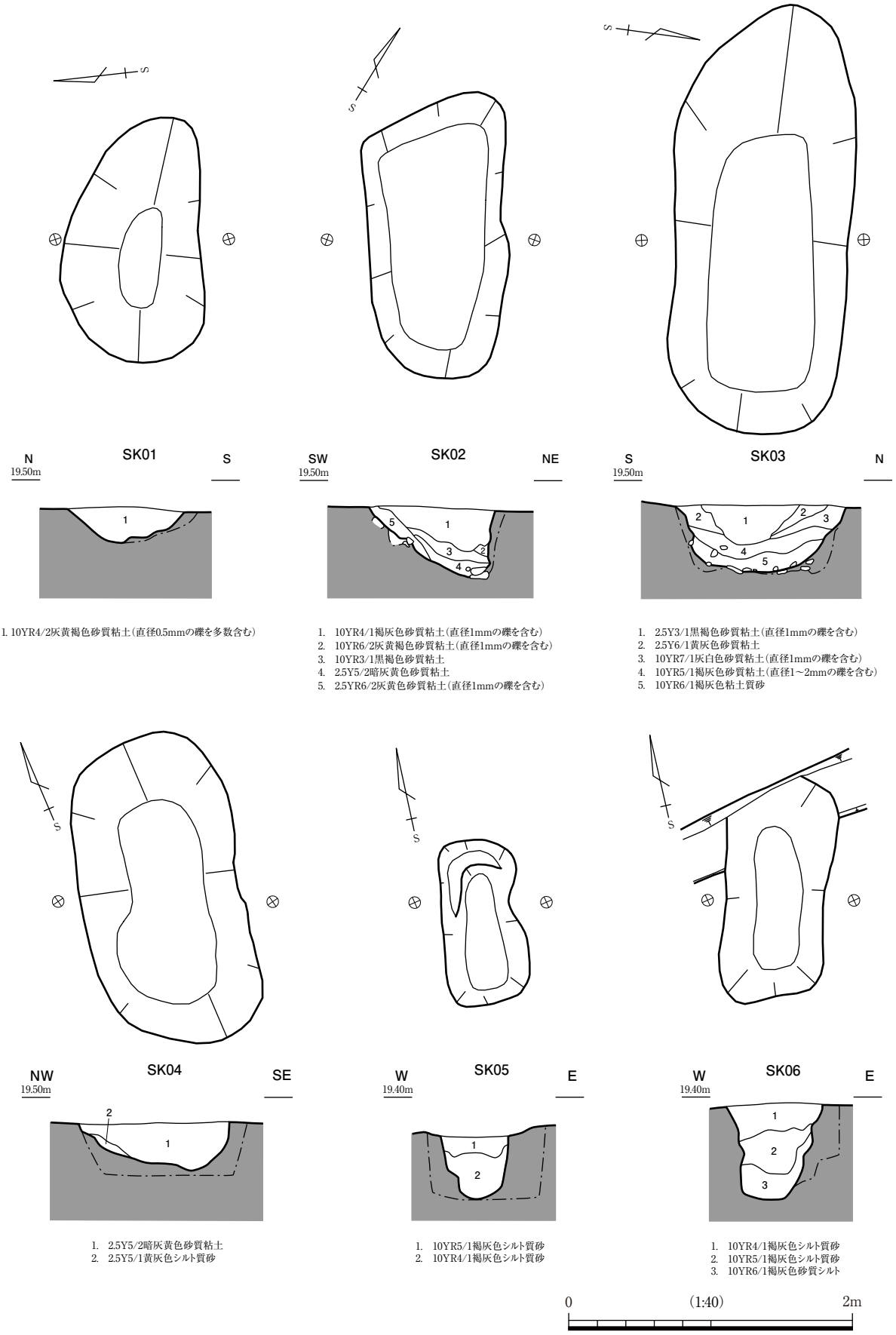


図 9　土坑（SK01 ～ 06）平面図・断面図（1/40）

SK09（図 4，図版 4 － 6） 調査区北西側で検出した土坑で，遺構の北半は調査区の外側へと続く。SK09 の東西長は約 0.86m，南北長は 0.5m 以上，深さは約 0.56m である。埋土は 3 層に細分できる。SK09 から遺物は出土していない。

d. 性格不明遺構

形状などが不定形で，なおかつ掘り込みの性格について推定が困難なもの，あるいは断定できないものについて，性格不明遺構として報告する。

SX02（図 10・11，図版 4 － 7，9） 調査区南東隅で検出した遺構である。SX02 は，遺構検出作業の最中に土器片が露出したことで認識した遺構である。当初は，周辺の遺構検出面よりも高い位置で土器片が出土したため上層から掘り込まれた新しい時期の遺構と考えていたが，背後に位置する調査区の南壁断面で検討した結果，むしろ SX02 の周囲を重機掘削でやや下げすぎたことが検証できた。よって，SX02 を当初の認識とは異なり，他の遺構と同じくⅢ層上面に掘削された遺構と判断した。

SX02 の掘り形は，SX02 の埋土とその基盤となるⅢ層との境界が不明瞭であったため，遺構の北側を断ち割ったうえで断面によって確認した。したがって，SX02 北半の掘り形の形状は不明である。残された南側の平面的な観察によれば，SX02 の掘り形は楕円形になるものと思われ，東西長は 0.8m 以上，南北長は 0.54m 以上，検出面からの深さは約 0.16m である。SX02 では，底部から 6cm 程度の深さまで土が堆積し，その上に外面を掘り形の底部に向けた土器が据えられていた。この土器の出土状況より，SX02 は土器棺墓の可能性が高いと考えられる。

SX02 の埋土は大別して 2 層に整理でき，下位の堆積は土器を設置する前の土層（図 10 の断面図 3 層），上位の堆積は土器の内部に堆積した土層（図 10 の断面図 1・2 層）である。このように，SX02 の埋土は異なる性格の堆積として二大別できるが，それぞれの埋土の土質は大きく異ならず，いずれもシルト質砂であった。この土器以外に SX02 から遺物は出土していないが，埋設された甕の体部（図 11 － 48）の年代観から，SX02 は弥生時代後期に帰属する遺構と考えられる。

SX03（図 10・11，図版 4 － 8，9） 調査区中央やや南側で遺物包含層を除去したのちに検出した掘り込みである。SX03 は，掘り形の南側が突出する不整形な形状で，長軸約 2.78m，短軸約 1.88m，検出面からの深さは約 0.5m である。SX03 の底部は，南端から中央付近にかけて緩やかに北側に傾斜し，そこからは急激に一段落ち込む。一方，北側の壁面は直立気味に立ち上がることから，南側の壁面の状況とは大きく異なる。SX03 の埋土は 2 層に細分できる。SX03 から出土した遺物は出土層位を分けて取り上げることはできなかったが，下層（図 10 の断面図 2 層）から多くの遺物が出土したことを確認した。出土したのは弥生時代前期に帰属する木葉文を施した壺の体部片やサヌカイト製のスクレーパーなどである（図 11 － 49 ～ 51）。同地区で検出した他の遺構に弥生時代前期の遺構が認められないことから，SX03 から前期の遺物が出土したものの，前期の所産と断定することには検討を要する。また，SX03 の性格については，壁面の状況などから人為的に掘削した遺構というよりも，自然地形の凹凸の可能性が高いと考えられる。

SX04（図 10） 調査区北側中央で検出した。当地点には前述のとおり近世以降の攪乱が多数掘削されており，SX04 も堀り形の一部を破壊されている。SX04 は，当初，北側の掘り形を土坑，南側の掘り形を性格不明の掘り込みと考え，異なるものと判断していた。しかし，双方の調査を進めるなかで，埋土が類似する点，北側の掘り形が南側の掘り形の延長線上にある点，検出面からの深さがほぼ同じである点，以上の諸点を根拠として最終的に同一の掘り込みと判断した。

SX04 は，おおむね南北方向に延びる溝状の遺構で，検出長は約 10.4m，最大幅は約 2.4m，検出面からの深さは 0.06 ～ 0.08m である。掘り込みの性格については，認識に至る経緯が上記のとおりであるため，溝の可能性が高いと考えられるが断定できない。なお，SX04 が溝であった場合，谷状地形に向かって底部が低くなることから，谷状地形に向けて掘削された排水を目的とする溝の可能性を考えることができる。ただし，SX04 の断面観察からは流水の痕跡は認められず，上記の推定を積極的に認める根拠は見出せなかった。SX04 から遺物は出土していない。

e. 溝

調査区中央付近で検出したすべての溝は，層位的に遺物包含層の下位にあたる。これらの溝の大半は，

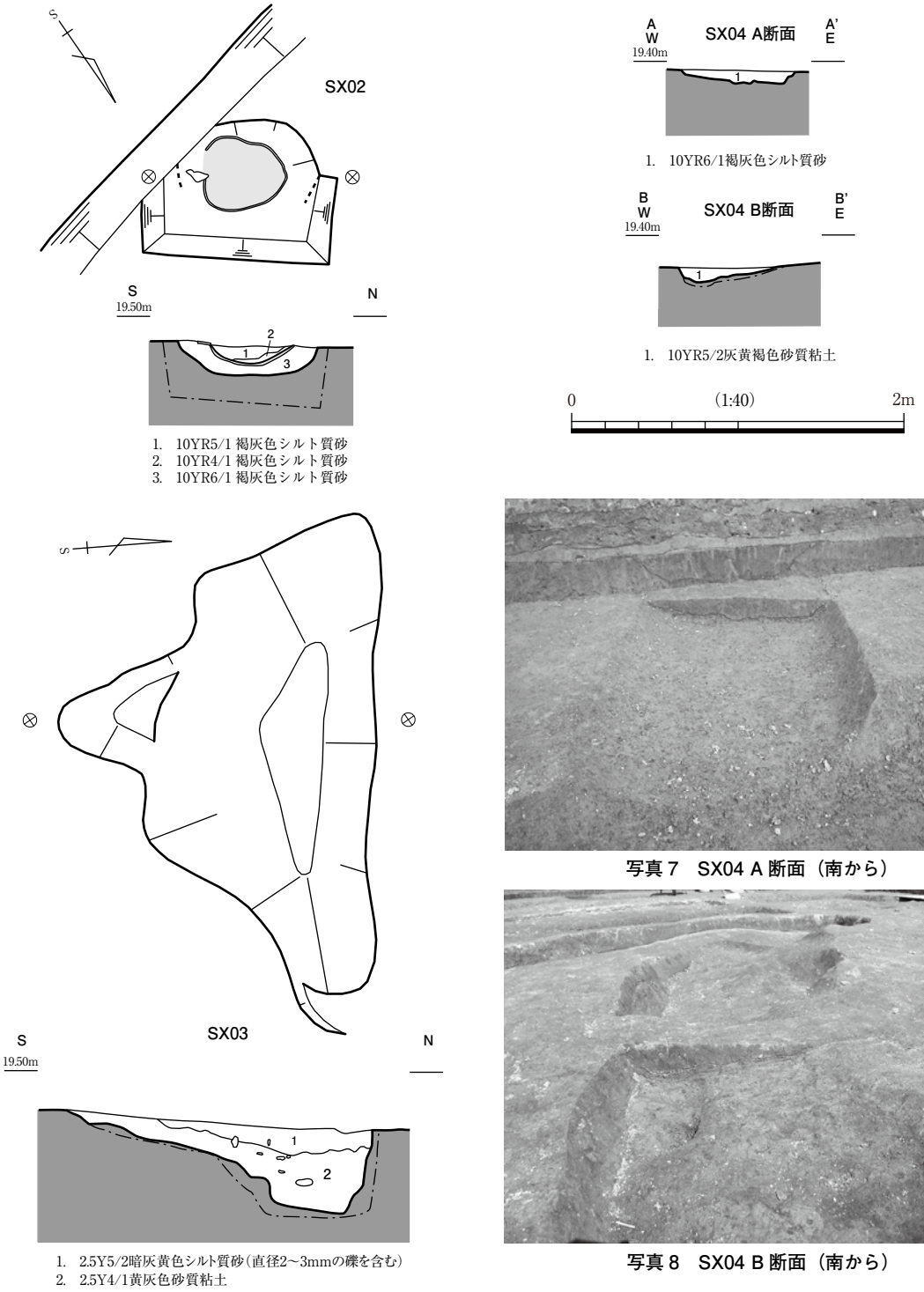


写真７　SX04 A 断面（南から）

写真８　SX04 B 断面（南から）

図 10　性格不明遺構（SX02 ～ 04）平面図・断面図（1/40）
SX04の断面の位置は図4に示した

地形の傾斜に平行するように南東から北西方向に掘削されているが，SD11 のみ北東から南西方向に掘削され，SD06 と合流する。なお，溝に水が流れていた痕跡を確認できたのは SD02 の 1 条のみである。これらの溝は谷状地形内に掘削されており，周囲に溜まった水が集まる場所に掘削されていることから，排水を意図して掘削された溝の可能性が高いと考えられる。

SD01（図 12）　調査区中央付近で検出したおおむね東西方向の溝である。SD01 は非常に浅く，溝のなかほどで 4.1m 分を検出することができず，その西側で再び平面形を確認した。これは後世の削平の結果と考えられるが，分断して図化した双方の溝は，幅・深さや埋土，さらに延長線上に位置することなどから同一の溝と考えられる。よって，遺存していなかった部分も本来は溝が掘削されていたものと判断した。

SD01 の検出長は削平された部分も含めて 12.3m，幅は 0.3 ～ 0.44m，検出面からの深さは 0.06m である。

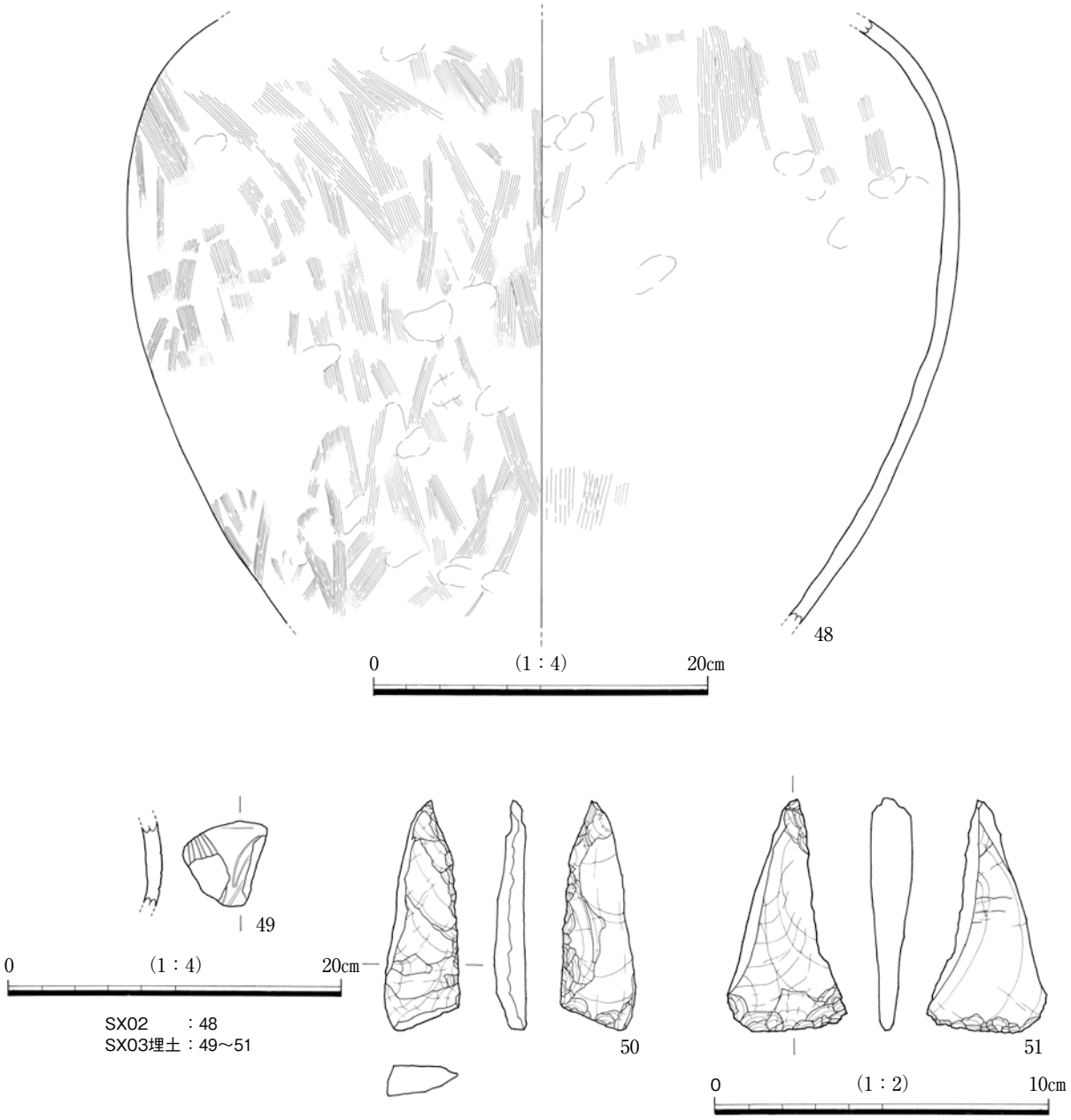


図 11　性格不明遺構（SX02・03）出土遺物実測図（土器：1/4，石器：1/2）

SD01 は，おおむね地形に沿って掘削された溝と考えられ，北側に位置する SD02 とは 4.8 ～ 6.5m の間隔がある。なお，SD01 は SP07 と重複関係にあり，断面観察より SP07 が埋没したのちに SD01 が掘削されたことが明らかとなった。SD01 からは，図化できない弥生土器の小片が出土した。

SD02（図 12，図版 5 － 1・2）　調査区中央付近に位置し，谷状地形の内部に掘削された溝である。SD02 の北側には 5㎝の間隔を空けて SD03 がほぼ平行して掘削されていた。SD02 は，谷状地形の低地部をほぼ一直線に掘削しており，検出長は 18.7m，幅は 0.9 ～ 1.2m，検出面からの深さは 0.14m である。SD02 の埋土は 2 層に分かれるが，上層は谷状地形を埋める遺物包含層であることから，谷状地形が埋まるのと同時に SD02 も最終的に埋没したことが分かる。SD02 の下層は黄灰色シルト質砂が 5㎝前後の厚さで堆積するが，その層相より，下層は SD02 に流水があったことを示す堆積と判断できる。なお，SD02 の底部の高さは，東側の方が西側よりも 5㎝程度高いことから，東から西に向けて水は流れていたことが推定できる。

SD02 は，調査時の所見では下層から遺物は出土しておらず上層のみに遺物が含まれていた。なお，出土遺物は図化することができない弥生土器の破片などがある。

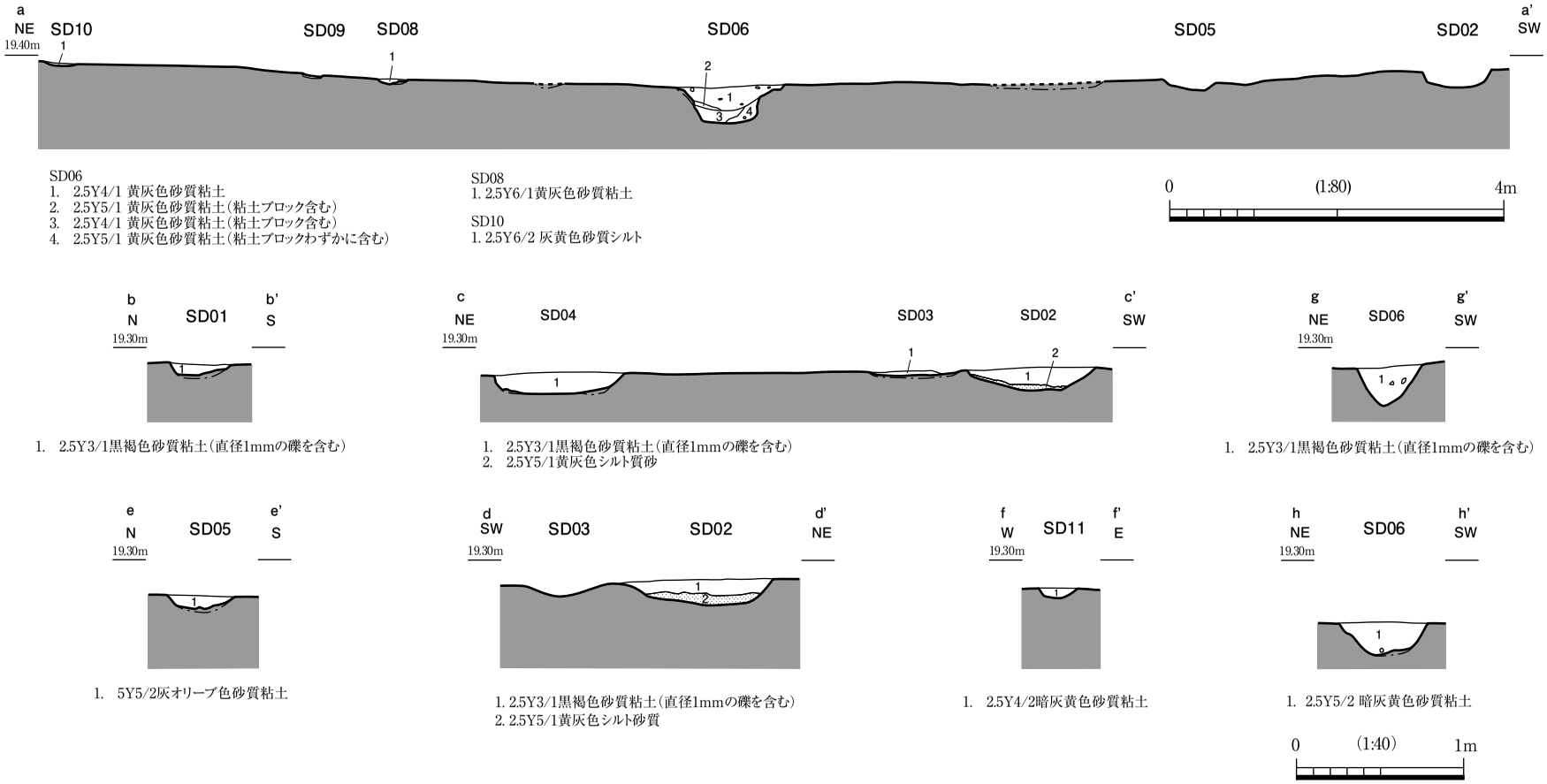


図 12　溝断面図（1/40，1/80）

断面の位置は図 4 に示した

SD03（図 12） 先述した SD02 の北側にほぼ平行して掘削された溝である。SD03 の検出長は 9.5m，幅は 0.32 ～ 0.96m，検出面からの深さは 0.02m である。SD03 も遺物包含層で埋没しており，谷状地形が埋没する直前まで存在した溝であると推定できる。SD03 から遺物は出土していない。

写真 9　SD06 埋土上半 遺物出土状況（東から）

SD04（図 12） SD03 の北側に掘削された東西方向の溝で，約 5.4m 分を検出した。SD04 の西側は遺存しておらず検出できなかったが，本来はさらに西側まで掘削されていたものと考えられる。SD04 の西端には，隣接して SD05 が位置するが，溝の掘削された方向がわずかにずれており，同一の溝とは異なると判断した。SD04 の幅は 0.78m，検出面からの深さは 0.12m で，他の溝と同様に遺物包含層で埋没する。SD04 から遺物は出土していない。

SD05（図 12, 図版 10） 調査区中央付近に位置し, SD04 の西端に隣接して掘削された東西方向の溝である。SD05 の西側は, やや南に屈曲する。SD05 の検出長は約 10.8m で, 溝の西側と東側の続きは確認できなかったが, 本来は掘削されていたと考えられる。SD05 の幅は 0.3 ～ 0.78m, 検出面からの深さは 0.12m である。SD05 からは弥生土器の底部片が出土した（図 14 － 52）。

SD06（図 12・13，図版 5 － 3 ～ 8，6 － 1 ～ 5，10）

谷状地形の底部に掘削された東西方向の溝である。SD06 は，調査区のなかほどで掘り形がふくらみ，屈曲して西側へと続く。SD06 の検出長は約 21m，幅は 0.42 ～ 1.48m，検出面からの深さは約 0.2 ～ 0.4m である。SD06 の底部の高さを見ると，溝の西側と東側ではほとんど高低差はなく，むしろ SD06 のなかほどで 10cm 程度低くなる。したがって，SD06 は溝の中央に向かって東西両側から低くなる溝と言うことができる。SD06 は，東壁断面の観察から，谷状地形を充填する遺物包含層で埋没することが確認できた。一方，溝が機能した段階の堆積については明らかでなく，底部に砂が堆積するなど流水があった痕跡は認められなかった。SD06 は SD11 と重複関係にあるが，合流点に設けた土層観察用の畦では前後関係は認められなかったため，双方の溝は埋没する直前の段階で同時に機能していたことが分かる。SD06 では，SD11 との合流点から SD06 内の土坑周辺にかけて，とくに溝の上半で多くの遺物が出土する傾向が認められたが（写真 9），溝の底部からも甕や高杯などの遺物が出土した（図 14 － 53 ～ 60）。また，これらの遺物のなかには，遺物包含層と SD06 の埋土から出土した双方の破片が接合した甕口縁部片（図 14 － 61）もある。

SD06 では，掘り形がふくらむ地点の溝の底部で土坑を 1 基検出した。この土坑は，SD06 の埋土を除去したのちに溝の底部で検出した遺構である。土坑の東側と西側の基盤となる SD06 の底部は，土坑に向かってスロープ状に低くなる点が特徴で，このことから，土坑の掘削時に溝をいくらか加工している可能性が考えられる。こ

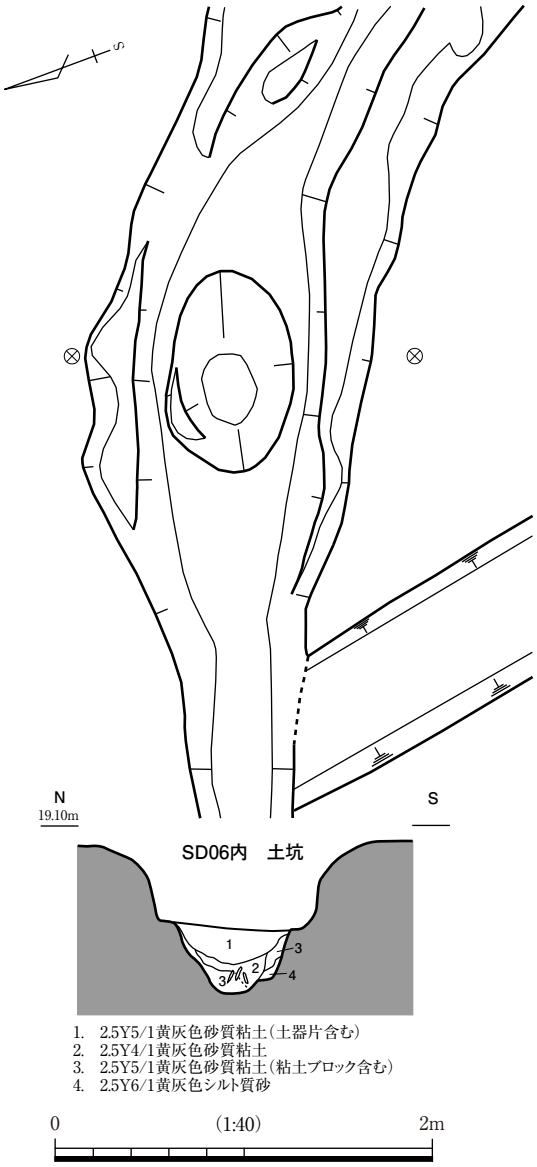


図 13　SD06 内土坑平面図・断面図（1/40）

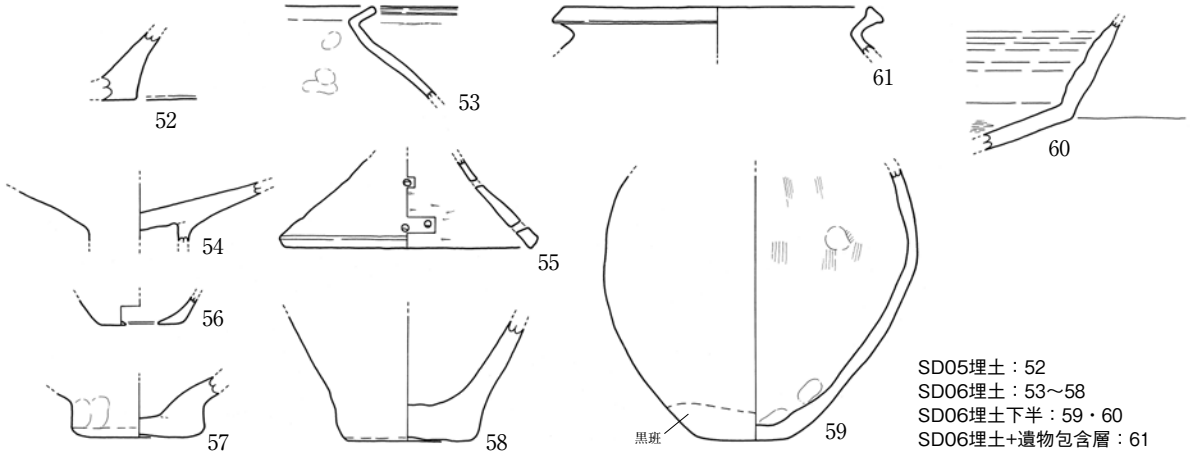


図 14　SD05・06 出土遺物実測図（1/4）

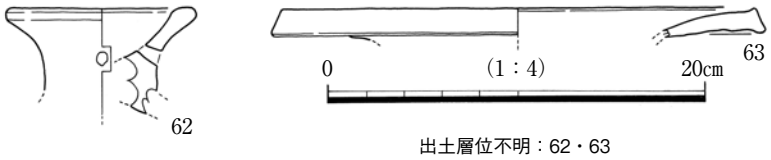


図 15　その他の出土遺物（1/4）

の見方が正しければ，SD06 と一連で機能した土坑と推定することができる。土坑の掘り形は楕円形で，長軸は 1.06m，短軸は 0.6m，SD06 の底部からの深さは 0.34m である。土坑の埋土は，SD06 の埋土とは土質が異なり，全体的に砂を含む堆積物で構成されていた。なお，土坑の内部から弥生土器の破片が出土したが，図化することはできなかった。

SD07（図 12）　SD05 に隣接して掘削された東西方向の溝である。調査時には，SD07 は SD05 から分岐する溝と考えていたが，それを積極的に示す根拠もなく，むしろ溝の位置関係から，SD04 の西側延長部分にあたる可能性が高いと判断した。SD07 の検出長は約 2.1m，幅は 0.44m である。SD07 からは，図化できない弥生土器の破片が出土した。

SD08（図 12，図版 6 － 6）　SD06 の北側約 3m の地点に位置し，谷状地形の北側斜面部に掘削された東西方向の溝である。SD08 は東側で SD11 と重複関係を有しており，検出長約 7.5m，幅 0.2 ～ 0.48m，検出面からの深さは約 0.06m である。SD08 も遺物包含層によって埋没する。SD08 と SD11 の前後関係については，合流点に土層観察用畦を設けて確認したが，埋土による溝の前後関係は認められなかった。よって，SD08 と SD11 は少なくとも双方の埋没直前には同時に存在したことが推定できる。SD08 から遺物は出土していない。

SD09（図 12）　SD08 に隣接して掘削された東西方向の溝で，溝の東側で SD11 と重複関係を有する。SD09 は掘り形が 2 つに分かれて認められたが，位置関係から双方を同一の溝と判断した。また，溝の西側は後世の撹乱によって破壊されていた。SD09 の検出長は約 7.0m，幅は 0.4 ～ 0.6m，検出面からの深さは 0.02m で，SD09 も遺物包含層で埋没する。SD09 と SD11 の前後関係については，溝の埋土がわずかしか残っておらず，明確な前後関係を平面・断面ともに確認することはできなかった。SD09 から遺物は出土していない。

SD10（図 12，図版 6 － 7）　SD09 の北側約 2.4m の位置に掘削された東西方向の溝である。SD10 の検出長は約 5.7m，幅は 0.3 ～ 0.72m，検出面からの深さは約 0.03m である。平面での位置関係から，SD10 と SD11 は重複関係を持つことが予想できるが調査区内では確認することができず，関係を持つ溝かどうかは判断することができなかった。

SD10 は，SD10 の埋土の上に遺物包含層が堆積する様子を調査区の東壁断面で観察できることから，遺物包含層が堆積する前にすでに埋没していたことが分かる。SD10 から遺物は出土していない。

SD11（図 12，図版 6 － 8） 調査区の東側に掘削された南北方向の溝で，3 条の溝と重複関係を有する。調査結果から確実に言えることは，SD11 が SD06・08 の 2 条の溝とはある時期に同時に存在したという点である。また，SD11 の南端は SD06 よりも南側には続かないことから，とくに SD06 と密接に関連性を持つ溝であると推定できる。

SD11 の検出長は約 8.5m，幅は 0.18 ～ 0.3m，検出面からの深さは 0.06m である。SD11 は遺物包含層で埋没することが確認でき，溝の底部は地形の傾斜と同様に南側，すなわち SD06 に向かって低くなる。ただし，SD11 の断面観察では，流水の痕跡は認められなかった。SD11 からは，図化できない弥生土器の破片が出土した。

写真 10　SE01 断面（東から）

f. 井戸

SE01（図 6） 調査区の南側に位置し，SH01 を破壊して掘削される。SE01 は，遺構の底部付近でわずかながら湧水が認められたことと，遺構の形状などから井戸と判断した。SE01 の掘り形は東西方向に長い楕円形で，長軸約 4.34m，短軸約 3.54m，検出面からの深さは約 0.96m である。埋土は 3 層に細分できるが，いずれも砂を主体とする堆積物である（写真 10）。遺物は，近世以降の所産と考えられる瓦片と土器片が出土した。

第４章　総括

第１節　時期別の変遷

今回の発掘調査によって，おもに弥生時代後期と近世の遺構を検出した。しかし，その主要な土地利用は弥生時代後期になされたことが検出遺構の内容や数からも推定できる。ここでは，今回の調査成果の総括として，遺構・遺物の出土した弥生時代前期以降の当遺跡の様相を整理する。

弥生時代前期～中期

当地において，弥生時代前期～中期にかけての明確な遺構は検出していない。ただし，弥生時代後期までの遺物が出土した遺物包含層からは弥生時代中期に帰属する土器，SX03 からは弥生時代前期に帰属する土器片がそれぞれ出土している。従って，当地で当該期の明確な土地利用があったとは言えないが，周辺で弥生時代前期～中期にかけての遺構が存在する可能性は推定できる。

先に触れたように，空港跡地遺跡全体では弥生時代前期～中期にかけての遺構が少数ながら検出されているものの，現時点ではそれらの状況から大規模な集落を形成していたとは言いがたい。これらの要因は地形環境などいくつか想定できるだろうが，いずれにしても当地においては弥生時代前期～中期にかけての土地利用は低調だったと考えられる。

弥生時代後期

空港跡地遺跡における既往の調査を見ても，弥生時代後期が土地利用のうえでのひとつの画期になっていることは明白である。今回の調査でもその点が明らかとなり，とくに後期中葉から土地利用がおこなわれた様子が確認できた。

当調査区では，調査区中央付近でおおむね東西方向の谷状地形が認められ，その南側に竪穴建物跡１棟やピット・土坑，北側に土坑などが位置する。また，谷状地形の内部には，数条の溝が開削されていた。すべての遺構が同時に存在したとは断定できないが，遺物を含まない土坑に関しても，調査区全体の傾向からして後期段階の所産と想定するのが妥当だと考えられる。１棟のみ検出した SH01 の帰属時期は，出土遺物より弥生時代後期中葉と考えられ，この時期に当地が居住空間として確実に利用されていたことが分かる。今回の調査区は南北に細長いため，調査区内の微視的な土地利用の違いは見出しにくいが，谷状地形の南側のみに竪穴建物跡やピットなど居住に関わる遺構が認められることから，谷状地形を境界とした土地利用の違いが存在するのかもしれない。なお，SH01 の南東側には，弥生時代後期の土器棺墓の可能性がある遺構（SX02）が１基認められた。SH01 と同時期のものであれば，居住域と墓域との関係を知ることができる貴重な資料と言える。

谷状地形を充填する遺物包含層からも，弥生時代後期中葉の遺物が出土した。しかし，遺物包含層出土遺物は，SH01 出土遺物よりも若干新しい様相も認められることから，谷状地形の埋没は SH01 が機能した時期よりも新しい段階になるものと考えられる。

いずれにしても，今回の調査から指摘できることは，当地においても後期中葉に居住域として土地利用が確実におこなわれていたということで，今後，周辺地を調査する際には，当該期の居住空間がどの方向にどのように広がるのか，自然地形を考慮して検討することが求められる。なお，SH01 の埋土上半からは古墳時代に帰属する須恵器片が少数ながら出土しており，古墳時代に当地や周辺で何らかの人的活動がおこなわれていたことが推定できる。

近世以降

近世以降の遺構としては，SE01 が１基存在する。SE01 は調査区の南側に単独で存在するため位置づけには苦慮するが，耕作に関わる井戸の可能性などが考えられる。

以上，弥生時代から近世に至る当地の変遷を概観したが，今回の調査によって，これまで周知されていた空港跡地遺跡の隣接地で，空港跡地遺跡と同時期の遺構が分布することを確認できた。今回確認した遺構や遺物の内容や時期から，当調査区の遺構も空港跡地遺跡と一連の遺構として理解するのが妥当だと考えられる。今後も，空港跡地遺跡に隣接する地点の遺跡の有無を継続して把握するとともに，蓄積されたデータを整理したうえで空港跡地遺跡の範囲を検討していく必要があるだろう。

第２節　弥生時代後期中葉の竪穴建物跡について

今回の調査成果のなかで特筆できるのが，弥生時代後期中葉に帰属する SH01 を検出した点である。まず，SH01 の特徴を整理すると以下のとおりとなる。

（SH01の特徴）

① 建物の平面形は円形。

② 掘り形の直径は約 10.5m で，床面積の推定値は約 85㎡。

③ 建物の壁面に沿った位置に９基の主柱穴を配置し，建物中央に土坑が掘削される。

④ 遺物量はコンテナ整理箱１箱程度で，床面直上から出土した遺物がほとんど存在しない。

⑤ 建物の帰属時期は弥生時代後期中葉。

SH01 の特徴は以上の５点と考えられるが，建物の規模が大きいという点はとくに注目される。残念ながら同一の調査区で他の建物を検出していないため近隣に構築された建物と比較することはできないが，これまでに実施された周辺の調査事例との比較は可能である。以下に空港跡地遺跡を中心とした弥生時代後期の大型建物の事例を，前述の蔵本氏が示した微高地の分類に依拠して整理する（図２参照）。

B1 微高地では，弥生時代後期中葉の竪穴建物跡が検出されている[1)]。SHl02 は円形の竪穴建物跡で，直径約 11.0m，床面積が約 95㎡である。SHl02 は，建物の壁面に沿うように６基の柱穴が検出されており，これらが主柱穴と考えられている。建物の中央付近には楕円形の土坑が認められることから，当地区で検出した SH01 に類似する形状とも言える。同一の調査区ではこれ以外に同時期の竪穴建物跡は検出されていないが，一方で古墳時代前期初頭に建物が構築される点がひとつの特徴である。

今回の調査地からはやや離れるが，A 微高地の西側の微高地に立地する日暮・松林遺跡では，床面積が約 76㎡の竪穴建物跡 SH02 が検出されている[2)]。住居の形状は円形で，主柱穴は９基，床面中央には土坑，周囲には壁溝がめぐる。SH02 の帰属時期は弥生時代後期後葉であり，当調査で検出した SH01 よりも新しい時期の建物ではあるが，規模や形態などは類似すると言える。

以上見たように，規模の大きい建物は検出例が数例に限られるのが現状であり，一定規模を調査している空港跡地遺跡の状況を考慮すれば，70 ～ 80㎡前後の床面積を誇るこれらの建物は集落のなかでも特異な存在と言える。もちろん，集落のなかでの建物の位置づけを規模だけで決めることはできないが，ひとつの指標と考えることには一定の蓋然性があるだろう。よって，今回検出した SH01 についても，集落のなかでの位置づけをおこなう際には，規模の面での優位性は考慮すべきと考えられる。

さて，上記の事例に SH01 の内容を加えて整理すると，①弥生時代後期中葉に B1 微高地上に床面積が 80 ～ 90㎡の建物が２棟構築され，周辺の他の微高地では同時期に同規模の明確な建物は見られない，②大規模な建物の平面形はいずれも円形，以上２点を傾向として抽出できる。このことから，後期中葉の B1 微高地での竪穴建物のありかたが他の微高地とは異なり，大規模な建物を複数棟構築するという B1 微高地のなかでの傾向を推定することができる。この点については，今後周辺を調査する機会があれば検証していく必要があるだろう[3)]。なお，今回の調査成果と周辺の調査事例から，当地区周辺の居住域の分布について検討すると，当調査区の北側約 50m の地点で，以前に香川県教育委員会が調査しており，弥生時代後期の竪穴建物跡は検出されていない[4)]。この点を考慮したうえでなおかつ調査区の遺構配置と地形面を加味して考えると，仮に SH01 の周辺に同時期の建物が存在するとすれば，調査区内にある谷状地形よりも南側の南東～北西側に建物が分布する可能性が高いと言える。よって，今後，周辺で開発がおこなわれる場合には，この点を考慮した対応が求められる。

註・引用文献

1）乗松　真也（編）2004『空港跡地遺跡Ⅷ 空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第８冊』香川県教育委員会・香川県土地開発公社

2）山本 英之・中西 克也（編）1997『都市計画道路福岡多肥上町線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　日暮・松林遺跡』高松市教育委員会

3）弥生時代後期～古墳時代前期の大型住居の事例と傾向については，池見渉氏にご教示いただいた。記して感謝申し上げる。

4）木下　晴一（編）2002『空港跡地遺跡Ⅴ 空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第５冊』香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・香川県土地開発公社

遺構・遺物観察表

写真 11　南側調査区　全景（北西から）

表1　ピット一覧表

遺構番号	形状	法量（cm）		遺物	土　色
		長軸×短軸	深さ		
SP01	円形	28×26	10	×	① 10YR5/1 褐灰色砂質粘土
SP02	円形	28×27	14	×	① 10YR5/1 褐灰色砂質粘土 （粘土ブロックを多数含む）
SP03	楕円形	28×24	14	×	① 10YR4/1 褐灰色砂質粘土
SP04	楕円形	30×22	11	×	―
SP05	円形	27×26	10	×	① 10YR3/1 黒褐色砂質粘土 ② 10YR4/1 褐灰色砂質粘土
SP06	円形	29×25	8	×	① 10YR4/1 褐灰色砂質粘土 （直径 2 ～ 3cm の礫を含む）
SP07	楕円形	32×30	25	×	① 10YR3/1 黒褐色砂質粘土
SP08	楕円形	38×28	19	×	① 10YR4/1 褐灰色砂質粘土 （直径 1 ㎜の礫を含む）
SP09	楕円形	26×20	4	×	① 10YR4/1 褐灰色砂質粘土
SP10	円形	26×26	9	×	① 10YR5/1 褐灰色砂質粘土
SP11	円形	26×23	7	×	① 10YR5/1 褐灰色砂質粘土 （直径 1 ㎜の礫を多量に含む）
SP12	円形	22×22	10	×	① 10YR4/1 褐灰色砂質粘土
SP13	円形	22×22	4	×	① 10YR6/1 褐灰色砂質粘土
SP14	円形	20×20	8	×	① 10YR6/1 褐灰色砂質粘土
SP15	楕円形	30×28	5	×	① 10YR5/1 褐灰色砂質粘土
SP16	楕円形	44×36	10	×	① 10YR5/1 褐灰色砂質粘土 （粘土ブロックを含む）
SP17	円形	16×16	8	×	―
SP18	楕円形	30×26	10	×	① 10YR5/1 褐灰色砂質粘土
SP19	楕円形	46×40	20	○	① 2.5Y3/1 黒褐色砂質粘土
SP20	円形	22×22	69	×	―
SP21	円形	26×24	16	×	―
SP22	楕円形	30×20	5	×	―

表２　土器観察表（1）

掲載番号	挿図番号	遺構名 層位名	種類	器種 (部位)	法量(cm)			調整		色調	胎土	焼成
					口径	底径	器高	外面	内面	上:外面　下:内面	上:粗密　下:含有物など	
1	5	試掘調査 遺物包含層	弥生土器	甕 (口縁部)	—	—	〔4.0〕	摩滅	ナデ	10YR8/2灰白色 ～10YR7/4にぶい黄橙色 10YR8/2灰白色	粗 5mm以下の石英･長石･ 赤色粒を含む	良
2	5	試掘調査 遺物包含層	弥生土器	甕 (口縁部)	(14.6)	—	〔2.05〕	ナデ	ナデ	5YR6/6橙色 5YR6/6橙色	普 4mm以下の石英･長石を含む	良
3	5	本調査 遺物包含層	弥生土器	甕 (口縁部)	—	—	〔4.9〕	指オサエ →ナデ	ナデ	10YR8/4浅黄橙色 10YR8/2灰白色	粗 4mm以下の石英･長石を含む	良
4	5	本調査 遺物包含層	弥生土器	甕 (口縁部～体部)	(13.2)	—	〔4.0〕	ナデ	ヨコナデ 指オサエ →ナデ	7.5YR6/4にぶい橙色 5YR5/6明赤褐色	普 3mm以下の石英･長石･金雲母･ 角閃石･赤色粒を含む	良
5	5	本調査 遺物包含層	弥生土器	甕 (口縁部)	(16.2)	—	〔1.9〕	ナデ	ナデ	7.5YR5/4にぶい褐色 7.5YR5/4にぶい褐色	普 0.5～5mm以下の石英･長石･ 赤色粒を含む	良
6	5	本調査 遺物包含層	弥生土器	壺 (口縁部～頸部)	(18.6)	—	〔6.0〕	ナデ (口縁端部:刻み目)	ナデ	10YR8/3黄橙色 10YR8/1灰白色	粗 4mm以下の石英･長石を含む	不良
7	5	本調査 遺物包含層	弥生土器	壺 (口縁部)	—	—	〔2.5〕	ナデ, 横ナデ	ナデ	5YR5/4にぶい赤褐色 5YR6/6橙色	普 1～3mmの石英･長石･ 金雲母を含む	良
8	5	本調査 遺物包含層	弥生土器	壺 (体部)	—	—	〔7.0〕	摩滅 貼付突帯(3条)	摩滅	5YR6/8橙色 10YR4/1褐灰色	粗 5mm以下の石英･長石を含む	良
9	5	本調査 遺物包含層	弥生土器	高杯 (杯部)	—	—	〔5.7〕	摩滅	横ナデ ヘラミガキ	7.5YR5/4にぶい褐色 7.5YR6/4にぶい橙色	普 1～3mm以下の石英･長石を含む	良
10	5	本調査 遺物包含層	弥生土器	高杯 (杯部)	(25.8)	—	〔4.0〕	摩滅	摩滅	5YR5/6明赤褐色 7.5YR6/6橙色	普 7mm以下の石英･長石･ 角閃石を含む	良
11	5	本調査 遺物包含層	弥生土器	高杯 (杯部～脚部)	—	—	〔3.1〕	摩滅	ハケ →ナデ	7.5YR5/4にぶい褐色 7.5YR5/4にぶい褐色	普 1～3mmの石英･長石･ 赤色粒を含む	良
12	5	本調査 遺物包含層	弥生土器	高杯 (杯部～脚部)	—	—	〔5.0〕	ナデ	ナデ シボリ目	7.5YR6/4にぶい橙色 7.5YR5/6明褐色	粗 3mm以下の石英･長石を含む	良
13	5	本調査 遺物包含層	弥生土器	高杯 (杯部～脚部)	—	〔15.0〕	〔14.5〕	ナデ	ヘラミガキ シボリ目	7.5YR6/3にぶい褐色 7.5YR6/4にぶい橙色	普 2mm以下の石英･長石を含む	良
14	5	本調査 遺物包含層	弥生土器	鉢 (口縁部)	(39.2)	—	〔7.7〕	摩滅	摩滅	7.5YR6/4にぶい橙色 7.5YR7/4にぶい橙色	普 5mm以下の石英･長石･ 赤色粒を含む	良
15	5	本調査 遺物包含層	弥生土器	(底部)	—	(6.2)	〔1.8〕	指オサエ →ナデ	板ナデ	10YR3/1黒褐色 10YR5/3にぶい黄褐色	普 4mm以下の石英･長石･ 金雲母･角閃石を含む	良
16	5	本調査 遺物包含層	弥生土器	(底部)	—	(3.0)	〔4.15〕	摩滅	指オサエ	10YR8/2灰白色 2.5Y6/1黄灰色	粗 4mm以下の石英･長石を含む	良
17	5	本調査 遺物包含層	弥生土器	(底部)	—	(9.0)	〔2.5〕	摩滅	摩滅	10YR7/2にぶい黄褐色 10YR7/2にぶい黄褐色	粗 1～3mmの石英･長石を含む	良
18	5	本調査 遺物包含層	弥生土器	(底部)	—	(7.9)	〔3.85〕	ナデ	ナデ	N3/0暗灰色 10YR8/3浅黄橙色	粗 3mm以下の石英･長石を含む	良
19	5	本調査 遺物包含層	弥生土器	(底部)	—	(9.9)	〔4.8〕	摩滅	摩滅	10YR7/2にぶい黄橙色 10YR7/2にぶい黄橙色	粗 5mm以下の石英･長石を含む	良
20	5	本調査 遺物包含層	弥生土器	(底部)	—	(9.0)	〔2.5〕	摩滅	摩滅	2.5Y8/1灰白色 10YR7/2にぶい黄橙色	粗 1～3mmの砂粒を多く含む	良
21	5	本調査 遺物包含層	弥生土器	(底部)	—	(14.0)	〔4.1〕	ナデ	ナデ	10YR7/2にぶい黄橙色 7.5YR7/3にぶい橙色	粗 6mm以下の石英･長石を含む	良
22	5	本調査 遺物包含層	弥生土器	(底部)	—	(8.0)	〔4.7〕	摩滅	摩滅	10YR8/6黄橙色 10YR6/3にぶい黄橙色	粗 5mm以下の石英･長石を含む	良
26	7	SH01 埋土	弥生土器	甕 (口縁部)	(17.2)	—	〔2.0〕	横ナデ	横ナデ	7.5YR5/2灰褐色 7.5YR4/2灰褐色	普 1mm以下の石英･長石を含む	良
27	7	SH01 埋土	弥生土器	甕 (口縁部)	(13.4)	—	〔1.5〕	ナデ	ナデ	7.5YR6/4にぶい橙色 7.5YR6/4にぶい橙色	普 2mm以下の石英･長石を含む	良
28	7	SH01 埋土	弥生土器	壺 (口縁部)	—	—	〔2.0〕	摩滅	摩滅	7.5YR5/4にぶい褐色 7.5YR5/4にぶい褐色	普 1mm以下の石英･長石を含む	良
29	7	SH01 埋土	弥生土器	壺 (口縁部)	—	—	〔2.6〕	ナデ	ナデ	5YR6/4にぶい橙色 7.5YR6/4にぶい橙色	普 1～4mmの石英･ 赤色粒を含む	良
30	7	SH01 埋土	弥生土器	壺 (口縁部)	—	—	〔2.3〕	ナデ	横ナデ	10YR8/3浅黄橙色 10YR8/2灰白色	普 1mm以下の石英･長石を含む	良
31	7	SH01 埋土	弥生土器	高杯 (脚部)	(8.0)	—	〔3.3〕	ナデ	ナデ	5YR5/4にぶい橙色 5YR5/4にぶい赤褐色	普 1mm以下の石英･長石を含む	良
32	7	SH01 埋土	弥生土器	高杯 (杯部～脚部)	—	—	〔3.9〕	ナデ	ハケ	7.5YR5/2灰褐色 7.5YR5/2灰褐色	粗 3mm以下の石英･長石･ 金雲母･角閃石を含む	良
33	7	SH01 埋土	弥生土器	鉢	—	〔 4.6 〕	(6.7)	摩滅	摩滅 (板ナデ？)	10YR7/4にぶい黄橙色 10YR7/4にぶい黄橙色	普 2mm以下の石英･長石を含む	良
34	7	SH01 埋土	須恵器	杯蓋 (口縁部)	—	—	〔1.95〕	回転ナデ	回転ナデ	10YR6/1褐灰色 7.5YR6/3にぶい褐色	普 1mm以下の石英･長石を含む	良
35	7	SH01 1層	弥生土器	広口壺 (口縁部)	—	—	〔1.2〕	ナデ ＊一部が磨滅	ナデ	7.5YR5/4にぶい褐色 10YR6/4にぶい黄橙色	普 1mm以下の石英･長石･ 赤色粒を含む	良
36	7	SH01 1層	弥生土器	壺 (口縁部)	—	—	〔1.2〕	ナデ	ナデ	7.5YR7/3にぶい橙色 7.5YR7/2明褐色	普 1mm以下の石英･長石を含む	良
37	7	SH01 1層	須恵器	杯蓋 (口縁部)	—	—	〔2.5〕	回転ナデ	回転ナデ	10YR6/1褐灰色 2.5Y6/1黄灰色	普 1mm以下の石英･長石を含む	良
38	7	SH01 2層	弥生土器	鉢	13.8	5.6	7.5	ナデ ＊大部分が摩滅	摩滅	7.5YR7/4にぶい橙色 7.5YR7/4にぶい橙色	普 2mm以下の石英･長石を含む	良
39	7	SH01 2層	須恵器	杯蓋 (口縁部)	—	—	〔2.7〕	回転ナデ	回転ナデ	7.5YR6/3にぶい褐色 7.5YR6/3にぶい褐色	普 1mm以下の石英･長石･ 赤色粒を含む	良
40	7	SH01 3層	弥生土器	甕 (口縁部～体部)	(16.0)	—	〔4.7〕	口縁部:ナデ 体部:縦位ハケ	指オサエ, ナデ	7.5YR6/3にぶい褐色 7.5YR6/3にぶい褐色	普 1mm以下の石英･長石を含む	良
41	7	SH01 中央土坑	弥生土器	甕 (口縁部～体部)	(12.0)	—	〔5.75〕	ナデ	ナデ	10YR7/3にぶい黄橙色 10YR7/3にぶい黄橙色	粗 6mm以下の石英･長石を含む	良
42	7	SH01 中央土坑	弥生土器	高杯 (杯部)	—	—	〔3.9〕	ナデ	横ナデ	5YR5/4にぶい赤褐色 5YR6/4にぶい橙色	普 2mm以下の石英･長石･ 金雲母･角閃石を含む	良

表２　土器観察表（2）

掲載番号	挿図番号	遺構名 層位名	種類	器種 （部位）	法量（cm）			調整		色調	胎土	焼成
					口径	底径	器高	外面	内面	上：外面　下：内面	上：粗密　下：含有物など	
43	8	SP19 埋土	弥生土器	（底部）	—	(5.8)	〔3.7〕	摩滅	摩滅	5YR5/6明赤褐色 7.5YR7/3にぶい橙色	粗 5mm以下の石英・長石を含む	良
44	8	SP19 埋土	弥生土器	高杯 （脚部）	—	—	〔11.1〕	摩滅	ナデ シボリ目	10YR6/2灰黄褐色 10YR7/4にぶい黄橙色	粗 5mm以下の石英・長石を含む	良
48	11	SX02 （土器棺）	弥生土器	壺 （体部）	—	—	〔36.0〕	ハケ→ナデ	指オサエ， ハケ	5YR5/6明赤褐色 10YR6/4にぶい黄橙色 ～5YR5/6明赤褐色	普 7mm以下の石英・長石・ 金雲母を含む	良
49	11	SX03 埋土	弥生土器	壺 （体部）	—	—	長さ 〔5.1〕	摩滅	木葉文 ＊一部が磨滅	10YR6/4にぶい黄橙色 2.5Y7/2灰黄色	普 4mm以下の石英・長石を含む	良
52	14	SD05 埋土	弥生土器	（底部）	—	—	〔3.5〕	摩滅	指オサエ →ナデ	10YR8/1灰白色 10YR7/2にぶい黄橙色	粗 3mm以下の石英・長石を含む	不良
53	14	SD06 埋土	弥生土器	甕 （口縁部～体部）	—	—	(4.9)	ナデ ＊一部が磨滅	口縁部：ナデ 体部：指オサエ →ナデ	5YR5/4にぶい赤褐色 7.5YR6/3にぶい褐色	普 2mm以下の石英・長石・ 金雲母・角閃石を含む	良
54	14	SD06 埋土	弥生土器	高杯 （杯部～脚部）	—	—	〔3.2〕	ナデ	摩滅	7.5YR5/6明褐色 7.5YR5/6明褐色	普 1～3mm以下の石英・長石・ 赤色粒を含む	良
55	14	SD06 埋土	弥生土器	高杯 （脚部）	—	(13.0)	〔4.7〕	ナデ 円孔3個1対	横位 ヘラケズリ	7.5YR6/3にぶい褐色 7.5YR6/3にぶい褐色	普 2mm以下の石英・長石を含む	良
56	14	SD06 埋土	弥生土器	（底部）	—	4.4	〔1.4〕	摩滅	摩滅	2.5Y7/2灰黄色 10YR6/6明黄褐色	粗 4mm以下の石英・長石・ 金雲母・角閃石を含む	良
57	14	SD06 埋土	弥生土器	鉢 （底部）	—	(7.1)	〔2.7〕	底部：ナデ 体部：指オサエ→ナデ	ナデ	2.5Y5/6明赤褐色 10YR6/2灰黄褐色	粗 5mm以下の石英・長石を含む	良
58	14	SD06 埋土	弥生土器	甕 （底部）	—	6.5	〔6.6〕	摩滅	摩滅	10YR6/3にぶい黄橙色 2.5YR5/6明赤褐色	粗 7mm以下の石英・長石を含む	良
59	14	SD06 埋土下半	弥生土器	甕 （体部～底部）	—	4.8	〔14.0〕	摩滅 （底部付近：黒班）	縦位ハケ， 指オサエ→ナデ	7.5YR6/3にぶい褐色 7.5YR5/6明褐色	普 3mm以下の石英・長石を含む	良
60	14	SD06 埋土下半	弥生土器	高杯 （杯部）	—	—	〔6.9〕	摩滅	上半：横ナデ 下半：ヘラミガキ	7.5YR5/6明褐色 7.5YR5/6明褐色	普 2mm以下の石英・長石・ 赤色粒を含む	良
61	14	SD06 埋土 +遺物包含層	弥生土器	甕 （口縁部）	(16.0)	—	〔2.5〕	ナデ	ナデ ＊一部が磨滅	10YR6/3にぶい黄橙色 5YR6/6橙色	普 1mm以下の石英・長石・ 赤色粒を含む	良
62	15	出土層位 不明	弥生土器	蓋	つまみ 部径 (9.6)	—	〔5.6〕	摩滅	摩滅	5YR7/3にぶい橙色 5YR7/4にぶい橙色	粗 3mm以下の石英・長石を 多量に含む	不良
63	15	出土層位 不明	弥生土器	壺 （口縁部）	(25.0)	—	〔1.5〕	指オサエ →ナデ	ナデ	5YR7/8橙色 7.5YR7/2橙色	普 1～5mm以下の石英・長石・ 赤色粒を含む	良

法量のうち，（　　）の数値は復元値，〔　　〕の数値は残存値を示す。

表３　石器観察表

掲載番号	挿図番号	遺構名 層位名	器種	石材	法量（cm）			重量 （g）
					長さ	幅	厚さ	
23	5	本調査 遺物包含層	スクレイパー	サヌカイト	6.45	5.8	1.0	38.2
24	5	本調査 遺物包含層	石皿	砂岩	〔11.8〕	11.5	〔7.6〕	1700.0
25	5	本調査 遺物包含層	砥石？	花崗岩	〔7.1〕	〔6.2〕	〔5.75〕	289.7
45	8	SP19 埋土	自然礫	砂岩	〔7.4〕	〔5.5〕	6.1	274.2
46	8	SP19 埋土	敲石	砂岩	8.75	〔4.1〕	〔3.7〕	166.5
47	8	SP19 埋土	敲石	砂岩	10.3	5.0	4.8	387.2
50	11	SX03 埋土	楔形石器？	サヌカイト	6.8	1.2	0.9	14.8
51	11	SX03 埋土	スクレーパー	サヌカイト	6.9	3.6	1.2	19.0

法量のうち，〔　　〕の数値は残存値を示す。

写真図版

写真 12　SH01　全景（西から）

写 真 図 版 目 次

巻頭図版

1　SH01 全景（北東から）
2　SH01 全景（西から）

図版１

1　調査区東壁土層断面（西から）
2　調査区中央付近　Ⅲ層断ち割り状況（北西から）
3　南側調査区 完掘状況（北から）
4　南側調査区 完掘状況（南から）
5　北側調査区 完掘状況（北から）
6　北側調査区 完掘状況（南から）
7　北側調査区 完掘状況（北東から）
8　北側調査区 完掘状況（南東から）

図版２

1　SH01 南北断面（北東から）
2　SH01 東西断面（北西から）
3　SH01 南北断面 1 層の堆積状況（北東から）
4　SH01 東西断面東端（北西から）
5　SH01 完掘状況（西から）
6　SH01 完掘状況（北東から）
7　SH01 床面 土坑検出状況（南から）
8　SH01 床面 土坑断面（南から）

図版３

1　SH01 床面 SP01 断面（南から）
2　SH01 床面 SP02 断面（南西から）
3　SH01 床面 SP03 断面（南西から）
4　SH01 床面 SP04 断面（北西から）
5　SH01 床面 SP05 断面（北から）
6　SH01 床面 SP06 断面（北東から）
7　SH01 床面 SP07 断面（北東から）
8　SH01 床面 SP09 断面（南東から）

図版４

1　SK02 断面（南東から）
2　SK03 断面（東から）
3　SK04 断面（南から）
4　SK05 断面（南から）
5　SK06 断面（南から）
6　SK09 断面（南から）
7　SX02 土器出土状況（北東から）
8　SX03 断面（東から）

図版５

1　SD02 東側 完掘状況（北西から）
2　SD02 断面（南東から）
3　SD06 完掘状況（西から）
4　SD06 完掘状況（東から）
5　SD06 西側 断面（南東から）
6　SD06 中央 断面（南東から）
7　SD06 中央 底部遺物出土状況（北西から）
8　SD06 と SD11 の合流付近 遺物出土状況（南東から）

図版６

1　SD06 内土坑 半裁状況（北西から）
2　SD06 内土坑 断面（西から）
3　SD06 内土坑 完掘状況（西から）
4　SD06 内土坑 完掘状況（西から）
5　SD06 西側 完掘状況（北西から）
6　SD08 断面（東から）
7　SD10 断面（東から）
8　SD11 断面（南から）

図版７

遺物包含層 出土遺物

図版８

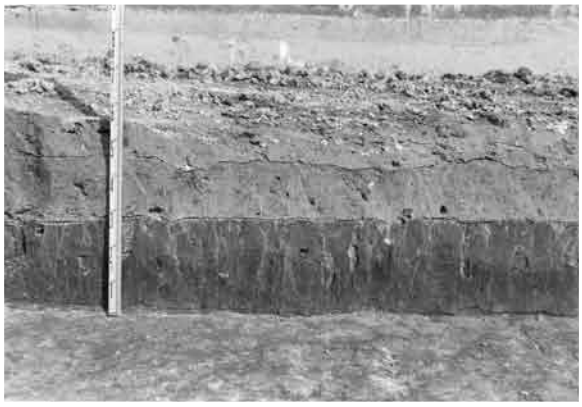
遺物包含層，SH01 出土遺物

図版９

SP19，SX02・03 出土遺物

図版10

SD05・06，出土層位不明遺物



1　調査区東壁土層断面（西から）

2　調査区中央付近 Ⅲ層断ち割り状況（北西から）

3　南側調査区 完掘状況（北から）

4　南側調査区 完掘状況（南から）

5　北側調査区 完掘状況（北から）

6　北側調査区 完掘状況（南から）

7　北側調査区 完掘状況（北東から）

8　北側調査区 完掘状況（南東から）

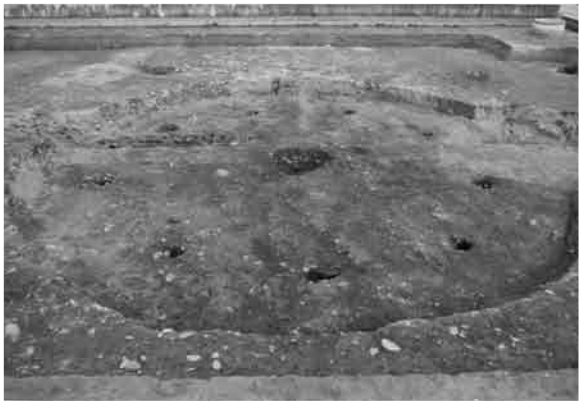
図版 2

1　SH01 南北断面（北東から）

2　SH01 東西断面（北西から）

3　SH01 南北断面 1 層の堆積状況（北東から）

4　SH01 東西断面東端（北西から）



5　SH01 完掘状況（西から）

6　SH01 完掘状況（北東から）

7　SH01 床面 土坑検出状況（南から）

8　SH01 床面 土坑断面（南から）

1　SH01 床面 SP01 断面（南から）

2　SH01 床面 SP02 断面（南西から）

3　SH01 床面 SP03 断面（南西から）

4　SH01 床面 SP04 断面（北西から）

5　SH01 床面 SP05 断面（北から）

6　SH01 床面 SP06 断面（北東から）

7　SH01 床面 SP07 断面（北東から）

8　SH01 床面 SP09 断面（南東から）

図版４

1　SK02 断面（南東から）

2　SK03 断面（東から）

3　SK04 断面（南から）

4　SK05 断面（南から）

5　SK06 断面（南から）

6　SK09 断面（南から）

7　SX02 土器出土状況（北東から）

8　SX03 断面（東から）

1　SD02 東側 完掘状況（北西から）

2　SD02 断面（南東から）

3　SD06 完掘状況（西から）

4　SD06 完掘状況（東から）

5　SD06 西側断面（南東から）

6　SD06 中央断面（南東から）

7　SD06 中央底部遺物出土状況（北西から）

8　SD06 と SD11 の合流付近遺物出土状況（南東から）

図版 6

1　SD06 内土坑 半裁状況（北西から）

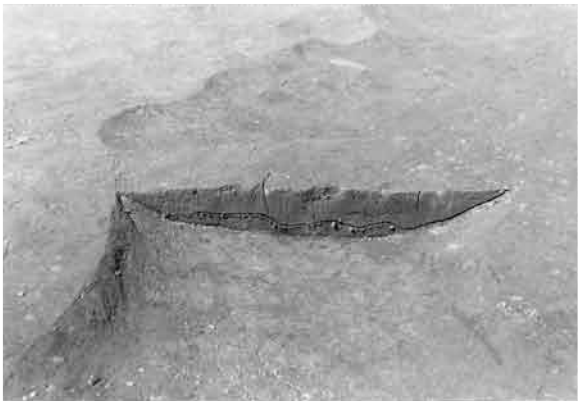
2　SD06 内土坑断面（西から）

3　SD06 内土坑 完掘状況（西から）

4　SD06 内土坑 完掘状況（西から）

5　SD06 西側 完掘状況（北西から）

6　SD08 断面（東から）

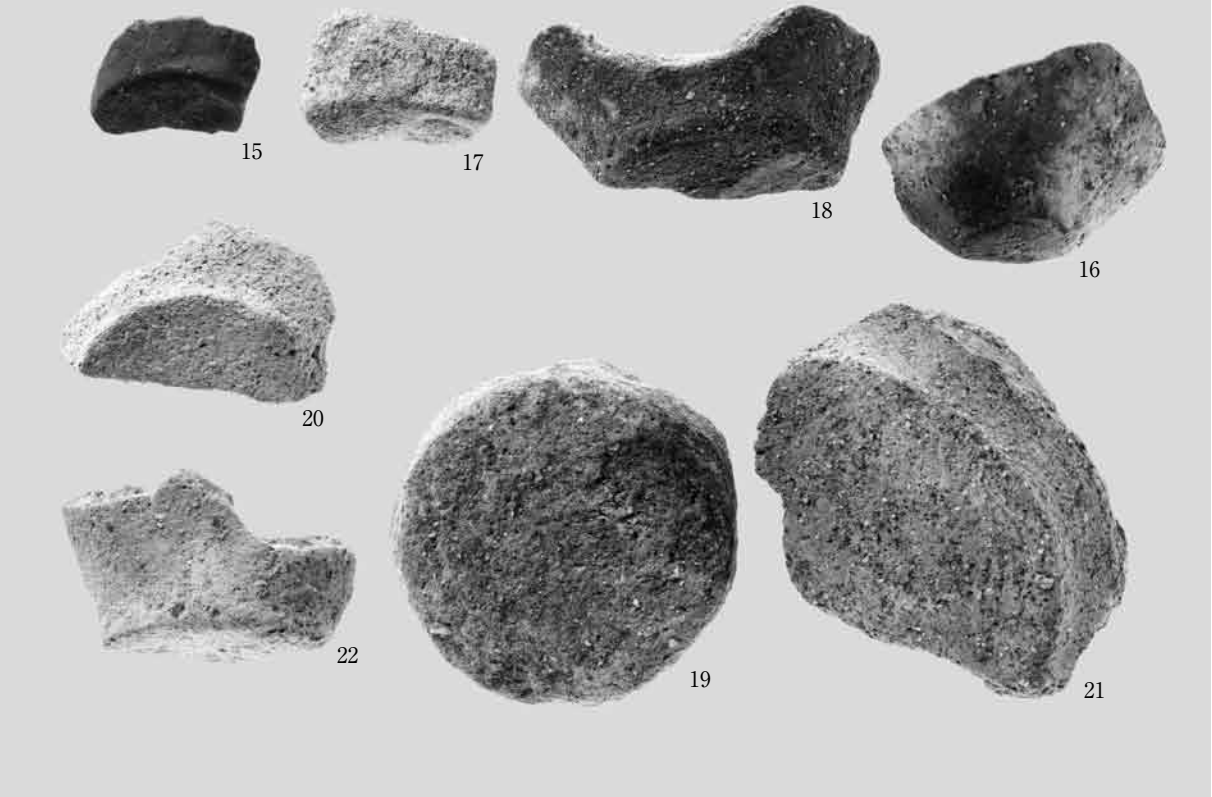


7　SD10 断面（東から）

8　SD11 断面（南から）

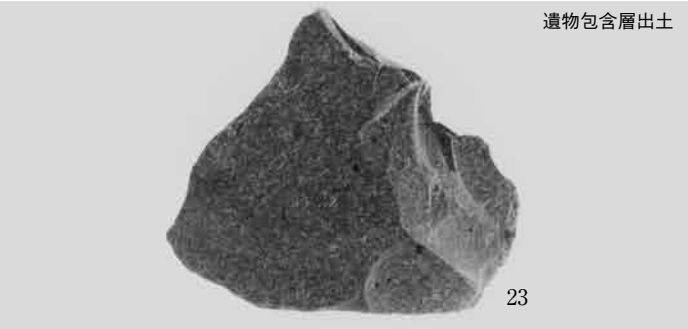
遺物包含層出土

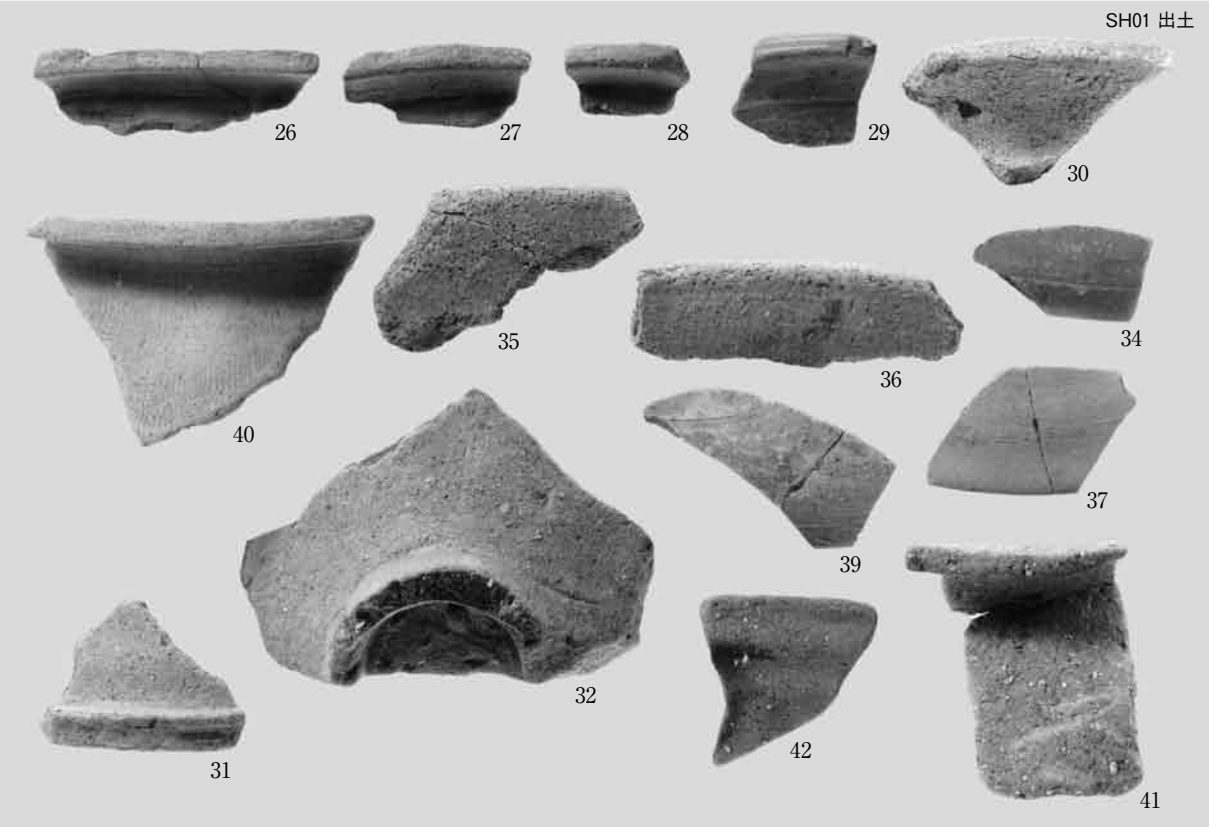
遺物包含層出土



遺物包含層出土遺物

図版 8





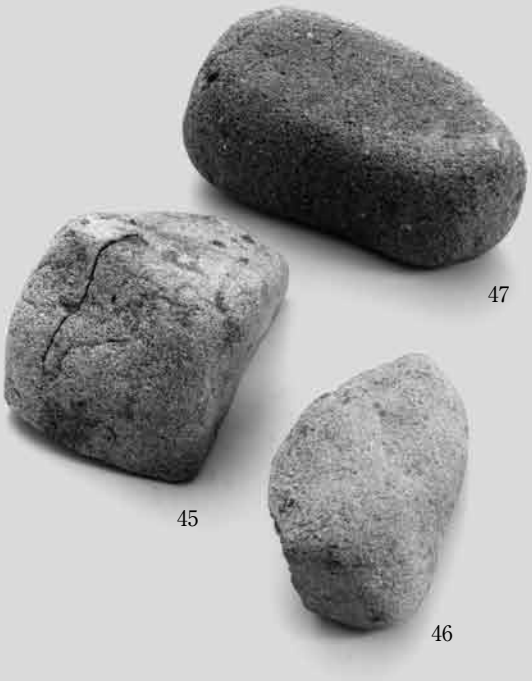
遺物包含層，SH01 出土遺物

SP19 出土

43

44

SP19 出土



47

45

46

SX03 出土

50

SX02 出土

48

SX03 出土

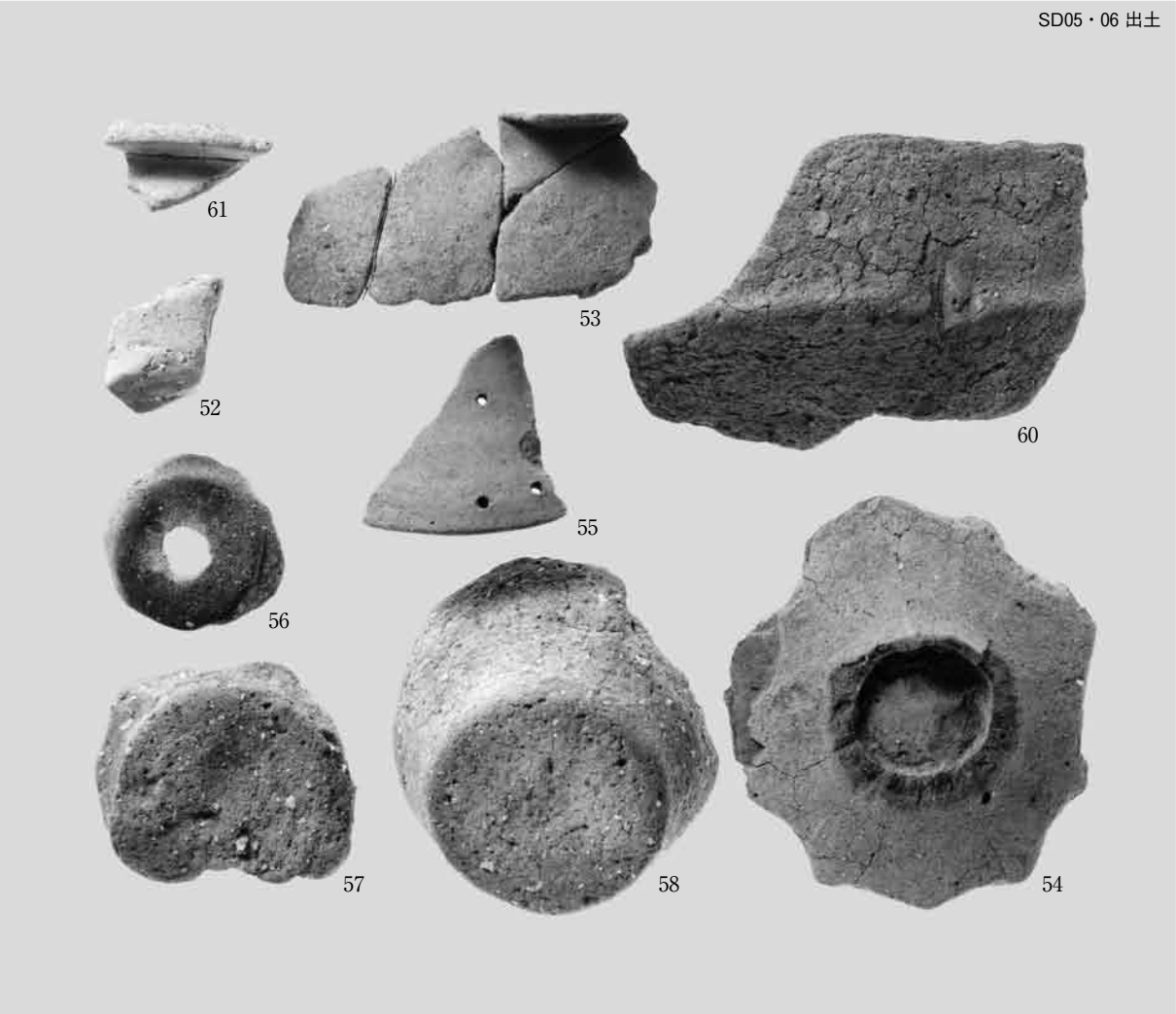
51

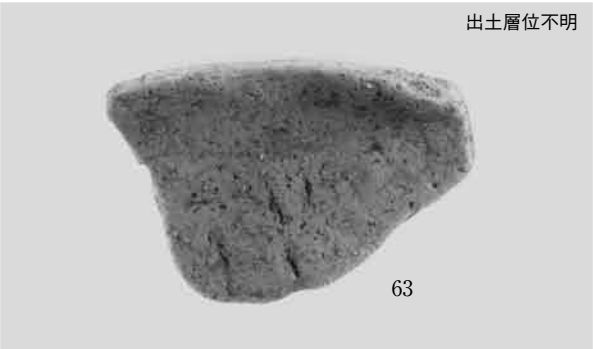
SX03 出土

49

SP19，SX02・03 出土遺物

図版 10





SD05・06，出土層位不明遺物

報　告　書　抄　録

ふりがな	くうこうあとちいせき（ほんむらちく）
書名	空港跡地遺跡（本村地区）
副書名	営業所新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第136集
編著者名	波多野　篤
編集機関	高松市教育委員会
所在地	〒760－8571　香川県高松市番町一丁目8番15号　TEL 087－839－2660
発行年月日	西暦2012年3月30日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	発掘期間	発掘面積	発掘原因
空港跡地遺跡（本村地区）（くうこうあとちいせき）	香川県（かがわけん）高松市（たかまつし）上林町（かみはやしちょう）	37201		34°17′31″	134°03′56″	2011.2.19～2011.3.15	900㎡	営業所新築工事

所収遺跡名	種別	おもな時代	おもな遺構	おもな遺物	特記事項
空港跡地遺跡	集落	弥生時代	竪穴建物跡 土坑 ピット 溝	弥生土器 石器	

要約	今回の調査では，弥生時代後期中葉の竪穴建物跡など集落に関わる遺構・遺物を検出した。とりわけ，直径10.5 m，床面積約85㎡の竪穴建物跡は，他の事例と比較しても規模が大きく注目される。今回の調査によって，周知の埋蔵文化財包蔵地である空港跡地遺跡は，さらに南側まで遺跡の範囲が広がることが明らかとなった。

営業所新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

空港跡地遺跡
（本村地区）

平成 24 年 3 月 30 日

編　集　　高松市教育委員会
　　高松市番町一丁目 8 番 15 号
発　行　　高松市教育委員会
印　刷　　株式会社 成光社